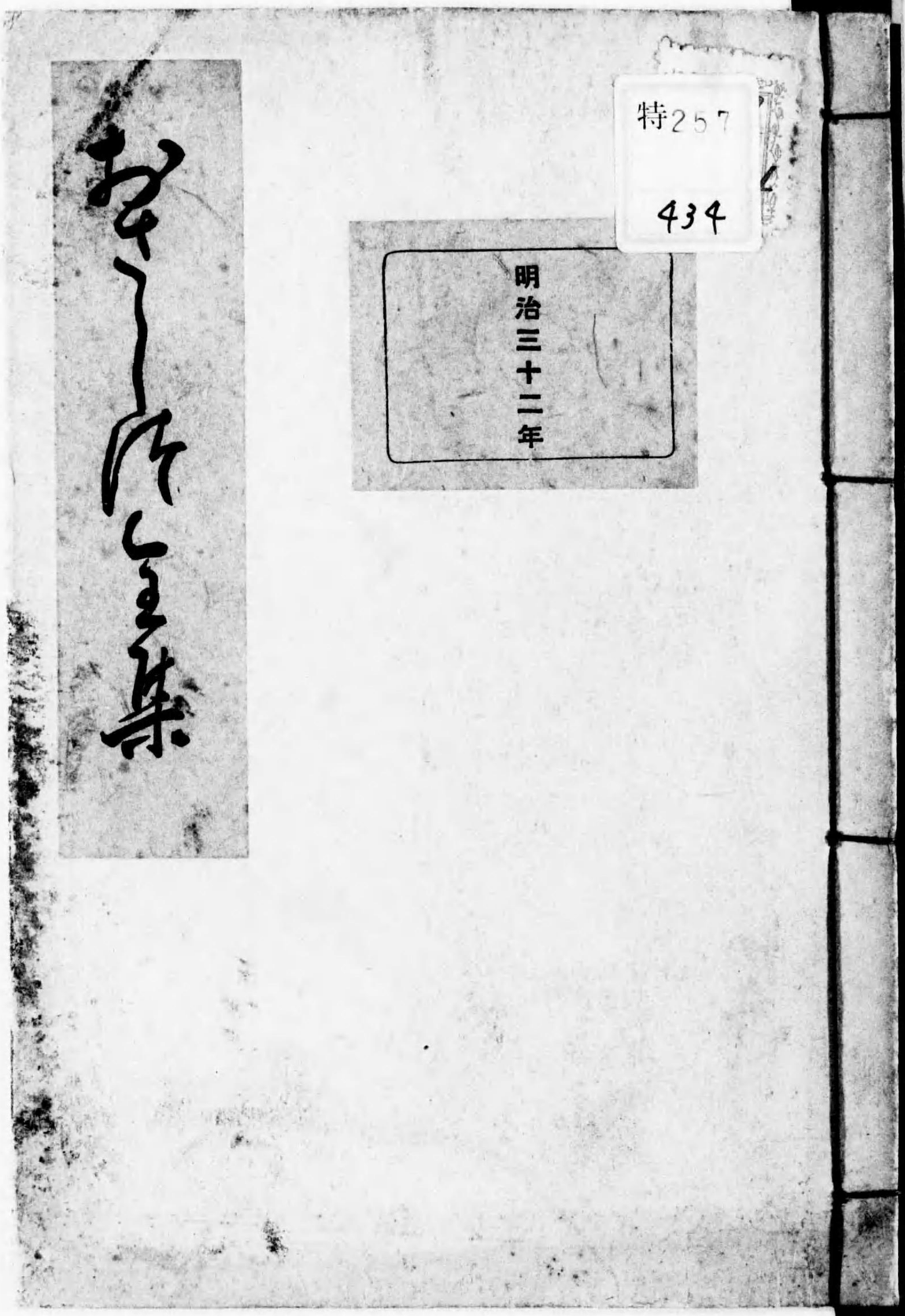

特257
434

始

特 257
434

おさしづ全集

昭和二十九年
天理図書館

御さしづ（明治三十二年）目次

△明治三十二年一月十四日本部地所買入に付運んでも宜敷御座いますか御願　（一　頁）
△同年一月十五日本部丑寅の方城作次氏宅地引合に付昨日御願申せば席をかへてゆつくり尋るようとの事に付右宅地に付ては如何と御願　（二　頁）
△押していさゝかの處は何時でもゆるしおくと仰せ下され、たいそうの處ぢつとしておくよう仰せ下さるが、なる處から買求めさしてもらいまして宜敷や御願　（三　頁）
△前々刻限の御指圖に付高き事情と云ふ處一寸

申上御願
△同年一月二十六日西浦彌平氏身上の御願　（四　頁）
△同年一月二十七日桝井おさめ胸つかへせつなくなるに付御願　（五　頁）
△同年二月二日夜、前の御さしづより一同打揃うて願出の御指圖　（六　頁）
△同年二月四日金米糖の御供の事に付世上に色々風説且注意も有之如何心得迄御願　（八　頁）
△押して大き處分教會へさげさしてもらいます　（二三頁）
△同年二月十八日寺田半兵衞家内まつ五十五歳身上御願（一昨年よりあるくといきどしくものをすると胸先へどうきうち、身にふるい出で昨年夏のかゝりよりだん〳〵ひどうなり、又此頃では追々せまり顏色あしく五六日以前よりせき出で候に付御願）　（二四頁）
△同年二月二十一日政甚様事情に付清水、桝井梅谷、平野の四名段々御運び下され大工、農業、商業の三點の内、本人大工と申され候結局教長様へ申上其上御本席様へ御返事申上下され候時是れで道が立つ十分やと御喜び下され四名の者へ仰せ下され候に三點の内政甚が大工修業すると申せしはわしはもふ滿足するこれきまりた通りたとへ三十日でもまもりてくれたらあす日どふなりてもかまはんと嬉し　（二五頁）

涙にむせび下され候時　（二八頁）
△同年二月二十四日城島分教會長上村死去以來眞なくして、只今の處總整理員として有りますが其後任定めに付て元上村の系統に致さんならんものでありますか又は役員の重達た者で定めて宜敷か役員同等の者澤山ありますが如何に致しまして宜敷か增野氏心得迄御願　（二九頁）
△本部員談示なり分教會一同談示致しましてと御願　（三二頁）
△又おして　（三三頁）
△同年二月二十七日西浦彌平氏五十六歳身上御願　（三三頁）
△押して日々むすびこめと仰せ下さるは詰員としてつとめて貰ひましてよろしきか　（三五頁）
△同年三月二日本部大裏の土持當村の宮池より土をとりて運ぶ事御願　（三五頁）
△同日押て願　（三六頁）
△同日櫟本梶本みきへ身上の御願十七歳　（三六頁）
△同年三月五日御本席樣一年程前より左の耳きこえぬに付願　（三八頁）
△同年三月十八日東部內深川支教會部下高崎出張所役員新井萬次郎身上御願三十二歳　（四一頁）
△同日清水與之助氏身上障りに付以前御指圖より夫婦共本部の方へ勤める事定め御願　（四四頁）

△押して夫婦共本部の方へ勤めさしてもらふよう引越して分教會の方を治めさせてもらいます　（四五頁）
△增野氏分教會一統へ咄し致して事情運びが爲出張さしてもらいますと御願　（四五頁）
△同年三月二十八日前御指圖より教長樣へ御伺申上げ、其趣きには婦人會の處何かくいきをたて、何かと名前付けまして宜敷ものかと御願　（四六頁）
△同日御勤めに出る鳴物の仕方の順序願　（五〇頁）
△押して願　（五一頁）
△押してこのおかた〳〵とみわける事　（五二頁）
△又願　（五二頁）
△手をうつてから又さしづあり　（五三頁）
△又一寸してからはなしあり　（五三頁）
△同年四月十一日增野氏身上御願　（五五頁）
△同日二名三名の處押して願　（五六頁）
△同年四月十三日永尾よしゑ身上御願　（五六頁）
△同年五月一日梅谷四郎兵衞氏の顏にものできて身上の願　（五八頁）
△同年五月十日梅谷四郎兵衞氏の顏の周りできて物出來しに付前御指圖に元づき押して御願　（六〇頁）
△押て本部にて日々會計の方御勤下さる事で有りますか　（六一頁）

△押して本部の上より部内修理致します事で有りますか　（六二頁）

△しばらくして　（六二頁）

△又しばらくして　（六三頁）

△同年五月十四日梅谷四郎兵衞氏身上の御指圖よりすうきりまかせてしまへとの仰せ下されるは分教會長を副會長梅二郎に任せる事でありますか御願　（六三頁）

△同日押して前々梅谷氏の身上御指圖修理と仰せ下され候は本部内らの事でありますか又部内先々の事でありますか　（六六頁）

△一先御引きになつて火鉢の御前にて御咄し　（六八頁）

△同年五月二十五日増野正兵衞氏身上御願　（七〇頁）

△押して城島分教會の方で御座りますか本部の方で御座りますかと御願　（七一頁）

△同年五月三十日朝御願五月二十日本局大祭に付教長樣御出京に相成大祭仕舞し後、管長稻葉正善公及野田幹事より教長樣に向ひ天理教會の從來本局の爲め盡力の廉により、目下の時機として別派獨立の恩命ありしに付歸部の上教長樣御心得として事情くはしく申上御願（御上京隨行員清水、永尾兩人）　（七二頁）

△同年五月三十一日前増野氏の御指圖より段々先生方協議の上、城島分教會の事であらふと

の事に付分教會にては未だ會長定まらずに付後任とすべき人は只今にて三名御座います、山田伊八郎氏は古き人なり又加見兵四郎氏は講社多分有り餘程道の爲めに盡力のせる人なり又峯畑爲吉氏は副會長の名もあり教會に餘程功ある人なり、目下取り定めに心配致し居りますから此段御願申上ます

（七五頁）

△押して山田伊八郎氏を會長と定めて宜し御座りますか

（七七頁）

△押して前の御指圖の中に『くもり〳〵』と仰せ下されしは如何の處で有りますか御願

（七七頁）

△押して只今御聞かせ下さるに付現場に御座りますか又心得に御聞かせ下さるや

（七九頁）

△同年六月六日獨立願に付教長樣御心得のため御願なされ候處右の御さしづに依り本部員一同へ御咄し下され其上分教會長を召集し分教會長へも同樣傳へ合、而して本部員、分教會長一同打揃ひ出席の上御願

（八〇頁）

△一同手を打ちしあとへつゞいて

（八二頁）

△同年六月十一日本部員西浦彌平氏身上御願

（八三頁）

△同年六月十四日清水、松村二名明十五日上京御許願

（八四頁）

△東京にて家屋一ケ所借入の願

（八五頁）

△同年六月十九日御本席樣三四日前頭痛にてた

んつかへ御休みに付御願
△同年六月二十五日清水與之助氏本局へ掛合事　（八五頁）
情願
△同年六月二十六日増野正兵衞氏の身上並に子　（八八頁）
息道興身上に付御願
△しばらくして　（九〇頁）
△押しておさへるとゆふ理如何御願　（九二頁）
△押して　（九三頁）
△押して　（九三頁）
△一寸して　（九四頁）
△同年六月二十七日昨日増野氏身上御指圖より　（九五頁）
一同協議の上御願

第一、梶本楢二郎氏政枝縁談に付前に一時聞
くと仰せ下され此儀は元々通りよせる事に致
します方が宜敷か、又さらに運びまして宜敷
か御願　（九五頁）
△押して前御願の事情　（九七頁）
△第二、只今普請中の建物はぜん〳〵刻限で名
前をつけると仰せられ候、右はどなたの名前
に致しましたものか　（九八頁）
△押して政枝さんの名前に致しますものか　（九九頁）
△第三、なら糸様の事情御願　（九九頁）
△第四、梶本宗太郎氏十三歳になれば屋敷へ引
寄せると仰せ置き下され候、本年は餘程年限

も立て御座りますが如何運びましてよろしきや　（一〇〇頁）
△四點の御願相濟一同手打しあとへつゞいて　（一〇一頁）
△押して　（一〇二頁）
△又一同手打し後へ　（一〇三頁）
△同年七月七日本局へ交渉のため上京中の清水松村兩氏より段々御運びの末申越され候に付本部員相談の上御願　（一〇三頁）
△永尾氏此運びに付上京の御願　（一〇五頁）
△同年七月二十三日獨立願書に添付する教會の起源及沿革御教祖の履歴、教義の大要に付御願　（一〇五頁）

△教師總代は本部員一同及び分教會長連印、信徒總代は國々の熱心の有志者を調印する御願　（一〇八頁）
△同年七月二十六日教長樣御出立御願　（一一〇頁）
△教長樣御上京隨行は清水、平野、松村、篠森永尾　（一一〇頁）
△同年七月二十四日櫟本梶本宗太郎氏及家族共御本部の方へ引越下さる事に付當分の處小二階の方へ住居して貰う事の御願　（一一一頁）
△押して子緣と仰せ下さる處、つゞいた子供衆でも一人のこしおいてつがす事でありますか又は德二郎でもつがす事でありますか　（一一二頁）
△同日上田奈良糸樣の運び方の事に付御願　（一一四頁）

△押して上田嘉助氏存命の時にこの家こぼつてしもて家内中引越してやらしてもろたら、なら糸おさまるやと御咄しもあつたとの事、又只今の家内中もそのせいしんありますなれど屋敷にいんねんあると教祖様よりきかしてもろていますから如何であろかと御尋ねありますに付心得のため御願　（一一六頁）

△又押しておとの處どふゆふ都合にはこばしてもらいますがよろし御座りまするか心得のため御願申上ます　（一一七頁）

△又押して前の事情萬事くわしく申上御願　（一一八頁）

△同年七月二十五日南海分教會長山田作治郎四

十歳身上御願

△押して心やすませと仰せ下さる處本人の家内であります　（一一八頁）

△押して結込んでやる事を運ぶ所は先方にたのんで教長様へ運ぶ事でありますか　（一二〇頁）

△同年八月五日天理教獨立願に付信徒總代の處本部一般部内有力者だけでは將來治め方に關する故、分教會長と共に調印して貰ひ度と取極めの處、只本局にては成る丈け小數の方がよからんとの注意もあり此邊人間心で決しかねます故御願申上ます　（一二〇頁）

△押して只今のおさしづからしやんすれば、此

度の事情は世界おふぼふの理でありますから
その理に治めさしてもろて宜敷御座りますか
御願
△しばらくして
△同年八月十一日日本橋分教會事情に付納方に
増野氏より書面にて御指圖の御願
△押して一人ではいかんと仰せ下さるが、上京
なして下さる御方もふ一人御苦勞してもらい
ましたら如何でありますか
△押しておもやくと仰せ下さるには分教會重役
で有ますか
△同年八月十七日日本橋分教會長前事情に付増

（一二三頁）
（一二四頁）
（一二五頁）
（一二六頁）
（一二七頁）

野氏段々御運びの上御願猶是に付將來如何致
まして宜敷か
△押して
△同年八月十七日桝井伊三郎長女いま十六歳身
上御願
△過日増野氏の身上よりの御指圖から、だん
〳〵の事情運んで居りますなれど是れとゆふ
てもまだ運びきれた事でありませんが其事で
ありますか又村田の方でありますか御願
△同年八月二十一日梶本宗太郎家族本部へ引越
すにより跡の處淺田德次郎に任せて引越候義
御願

（一二七頁）
（一二八頁）
（一二九頁）
（一三〇頁）
（一三一頁）

△前御願致しました通り小二階の方へ引越さしてもらいます事を御願　（一三四頁）

△同年八月二十一日日本橋分教會長の事情に付前御指圖より永尾、喜多の兩氏出張する事御願　（一三四頁）

△押して喜多氏先に出張致し一日あいあけて永尾氏出張下されて猶運びの都合に依て増野氏出張下さる事に運ばして貰ひます　（一三五頁）

△同年八月二十二日郡山分教會長平野楢藏氏身上御願　（一三六頁）

△同年八月二十六日御本席様一昨日より腰痛みに付御願　（一三九頁）

△同日山澤ひさ三十七歳身上に付御願　（一四一頁）

△同年九月一日日本橋分教會長中臺勘藏氏辭職に付永尾、喜多運びの都合により増野氏出張下さる事御願　（一四四頁）

△同日永尾よしゑ三十四歳身上願　（一四五頁）

△同年九月七日山澤ひさ三十七歳身上御願　（一四六頁）

△同年九月八日日本橋分教會長選定まで事務取扱人中臺庄之助を以て御許願　（一四九頁）

△同年九月十五日御本席様昨日夕方より俄に身上御障り有之候先日も同様の御障り有りしに付合せて御願ひ　（一五〇頁）

△押して三軒三棟の名前付る事此間教長様より

扱ひ人へ御聞せ下されし處、御本席様へ申上候へば普請落成なりてから願ふてくれと仰せ下さいましたが此事御知らせ下さいますのか　（一五二頁）

△押して三軒三棟の處、西の方は永尾で御本部の方は政甚で同新築の處政枝のよふに聞してもらいますが如何でありますか　（一五四頁）

△押して普請の處いそいで仕上げます　（一五五頁）

△同年九月十九日（舊八月十五日）忠藏氏の屋敷買入る事御願　（一五六頁）

△同日増井りん以前御指圖より教長様の御許し下されし別席御運び下され夫には本部員同格といふ御指圖もありますれど教長様より本部

員の御辭令御下げもらひまして詰所へ札かける處しきつて運んで御座りませんがしきりて教長様へ御願申して本部員の辭令も下げて貰ひましたものでありますか御願　（一五六頁）

△二人筆とつて御願　（一五八頁）

△押して會議にもでゝもらふ事でありますか　（一六〇頁）

△同年九月十九日北分教會整理に付高井、喜多兩氏出張仰せ下されしに付神様へ御許し願　（一六一頁）

△押して一つより治まらんと仰せ下さるは御道の理一つとは心得居りますなれど一寸御願申上ます　（一六二頁）

△同年九月二十二日梅谷おたね五十歳身上の御

願に付
△とみゑ引越の事　（一六二頁）
△老母も寄せます事でありますか　（一六三頁）
△お春も寄せます事御願　（一六三頁）
△同年九月二十九日御本席様御身上御願　（一六四頁）
△同年十月一日永尾楢二郎朝八時頃より腹痛に付御願　（一六四頁）
△押して三人の事だけでありますか此外に理のかゝりたる事もありますかと御願　（一六七頁）
△同年十月二日永尾楢二郎身上一段治まらん故御願　（一七一頁）
△押してみんな誠の心定めますから御助け下されたいと御願　（一七二頁）

△同年十月三日永尾楢二郎身上に付よしゑ、まさへ、政甚三名よりさんげへ申上御願　（一七五頁）
△政甚よりおして、これからみなしつかり心むすびよふて行きますから御助け下されたいと御願　（一七六頁）
△同年十月五日御本席様朝席運びの跡續いて刻限の御咄　（一七八頁）
△同日夜永尾畫の御指圖に付押して御願　（一八〇頁）
△押して畫の御指圖塲所とゆふ處御願　（一八三頁）
△暫らくして本部員一同墓の塲所な事談しいる内に　（一八七頁）
（一八八頁）

△おさとの處でありますか
△押して前か西か御願　（一八九頁）
△同年十月八日南海分教會長山田作治郎身上御願　（一八九頁）
△同年十月十二日寺田半兵衛身上御願（永尾楢二郎葬祭の翌日より胸腹いたみ少々上げ下しして胸いたみ左の顔しびれ左の親指しびれ候に付御願）　（一九一頁）
△しばらくして　（一九三頁）
△同年十月十六日午前十一時頃心得西の宅にて御咄しあり　（一九三頁）
△同年十月二十二日西田龜藏の身上御願　（一九五頁）
△しばらくして　（一九六頁）
△同年十月二十七日松村おさく身上御願　（一九六頁）
△同年十月二十八日增野正兵衛氏日本橋分教會へ出張に付御願　（一九八頁）
△同年十月三十一日永尾芳枝八木部内飯倉布教所へ事情運び方有之に付出張の事御願　（一九九頁）
△同年十一月二日（舊九月二十八日）夜四時刻限の御咄し　（二〇〇頁）
△同年十一月三日昨日朝四時頃の刻限より昨夜談示の上取違ひありましてはなりませんから押して御願　（二〇一頁）
△暫らくして　（二〇四頁）

△同年十一月十日八木支教會部内飯倉布教所擔任村田辰造の處後任渡邊平兵衞に致し度御願（二〇五頁）
△同日八木部内山邊出張所擔任村田榮次郎の處村田辰造に致し度御願（二〇五頁）
△同日村田辰造教會へ引越の御願（二〇五頁）
△同年十一月十五日松村さく身上すみやかならん故松村吉太郎よりおして御願（二〇六頁）
△押して分教會の事でありますか（二〇七頁）
△押して分教會の事でかゝりますか本部のよふでありますかと御願（二〇七頁）
△押して大縣の治め方でありますか御願（二〇七頁）
△同年十一月十五日飯降政甚當分新家へ家移りの御願（二〇八頁）
△押して政甚、政枝一所に暮しの事御願（二一〇頁）
△來る二十一日家移りの御願（二一〇頁）
△又押して政甚來る舊十月二十五日より大工修業解く事御願（二一一頁）
△おして日限は二十五日より（二一一頁）
△同年十一月十七日上田楢太郎十七歳身上の御願（二一一頁）
△同年十一月十一月二十二增野いと身上御願（二一三頁）
△同年十一月二十三日ペスト病豫防の爲本部舊十月大祭延期する事警察署より注告に付御願（二一五頁）
△押して電報にて部下へ通知する事御願（二一六頁）

△同年十一月二十七日桝井伊三郎小兒幸四郎一時ひきつけ病に付御願　（二一七頁）
△押して内々の事一つの事か押して願　（二一八頁）
△同年十二月一日松村のぶ目の障りに付御願　（二一八頁）
△同年十二月五日福田藤太郎御願　（二二〇頁）
△同年十二月六日桝井政治郎小兒なをゑ二人共身上御願　（二二一頁）
△中河分教會の方へ行く事はちがいますかと押て願　（二二三頁）
△又押して中河分教會へ政治郎行くのがわるう御座いますか　（二二四頁）
△又押して年のとれたものからとゆふ處願　（二二五頁）

△同年十二月七日清水與之助氏身上に付先日御指圖より思案致しまして分教會の方副會長富田氏にゆづりまして本部へ詰切に定めます方が宜敷よふに思ひますが此事取違致してはなりませんから心得までに御願　（二二六頁）
△押して分教會長名儀讓ります事　（二二七頁）
△押して分教會役員又支教會長一同へ運び方梅谷、増野兩氏出張御願　（二二八頁）
△押して運び方増野氏出張の事　（二二八頁）
△同年十二月九日宮森與之助氏身上より妻ひさ目の障りに付御願　（二二九頁）
△同年十二月十四日山澤爲藏小人まち七八日以

前より少々風邪の様に有之、又爲次三四日以前より同様にて今朝三時頃に餘程あしく相成候に付御願　（二三〇頁）
△同日梅谷部内深山民野氏に付縁談事情心得迄に御願、役員駒谷の子駒次郎十六歳　（二三三頁）
△同年十二月十九日河原町分教會副會長深谷德治郎三十歳身上障りに付御願　（二三三頁）
△押して會長深谷源次郎三島の方へ出るよう運び方の處申上御願　（二三四頁）
△押して深谷源次郎妻はな身上御願五十六歳　（二三五頁）
△押して河原町分教會長を副會長德次郎氏に譲る事に付委細御願　（二三六頁）

△押して會長夫婦三島事務所へ引越の御願　（二三六頁）
△同年十二月二十三日諸井政一身上御願　（二三七頁）
△押して會長譲りの事御願　（二三八頁）
△山名分教會長諸井國三郎氏の名義を副會長諸井清麿呂に切替の御願　（二三九頁）
△同年十二月二十五日山名分教會長譲り方に付運び方又部下の擔任へ治め方に付本部員梅谷喜多兩人出張の御願　（二三九頁）
△同年十二月二十七日桝井安松二十三歳身上御願　（二四〇頁）
△押して高安の部内大縣の方増野、山中氏が御運び下されますが、又日々の處の理の上の事

情でもありますか、又日々の御授け御運び下
されますのに教長様の代としていますが此邊
の事でありまするかと御願　（二四三頁）
△同年十二月二十九日高安分教會長松村吉太郎
氏母おさくの身上より御指圖ありそれより運
び方高安部内大縣支教會分離の事御願　（二四四頁）
△大縣支教會を分教會に引直しの御願　（二四四頁）
△同年十二月二十九日山田作治郎氏會長を副會
長に讓る事如何と心得まで御願　（二四五頁）
△押して山田作治郎身上の處まだ外に運び方も
ありますか御願　（二四七頁）
△同年十二月三十一日（舊十一月）夜、飯降ま
さるゑ七十日前より脊骨痛みに付相談の事情と
も申上げて御願　（二四八頁）
△互にはなしの中におはなし　（二五一頁）

御さしづ（明治三十二年）目次　終

明治三十二年

御さしづ

（明治三十二年）

△明治三十二年一月十四日本部地所買入に付運んでも宜敷御座り升か御願

さあ〳〵、何か尋る處〳〵、席も十分たいくつしてるによつて〳〵、又順序心それ〳〵一度席かへてゆつくり尋ねてくれ、萬事さとする事おくれたる、尋るさしづせにやならん、席十分たいくつなりたる日々つとめる事たいそうなれど、たいそうの顔をせずつとめている、それ〳〵おもうてやらにやならん〳〵。

△明治三十二年一月十五日本部丑寅の方城作次氏宅地引合に付、昨日御願申せば席をかへてゆつくり

尋るよふとの事に付、右宅地に付ては如何と御願

さあ〳〵事情、事情もつて事情尋る、さあ尋る事情にはさとしをせにやならん、さとしとゆふはどふゆふさとしなら、いそぐことあれば又いそがん事もある、地所〳〵とゆふは、あちらこちらどこからどこまでも定まりない、一時もつてどふせいこふせいとはゆはん、なる所から事情、年限事情をもつて心をよせ〳〵、どこからどこまで伺がありたら、どこがありたらとおもふなんぼがいになる處ほつておけ、なる處から心よせ、なるほど是丈とゆふ、ならん處むりにどふせへこふせへとはゆはん、中にどんなことあつたて、なる處からかるく事情ほんにそうと心をよせ、一つ地場〳〵といふ、なんでもかでもおよばす刻限こん、あちらこちらなるほどとゆふ處からなんでもおよばす、

年限の理をもつておよばす、何時一時によせるともわからん、どふしてよせるなら是迄なりてきた道をみよ〳〵、年限きたらみなよせる、そこでなんぼまん中に又じやまになりたてかまはん、おふきいできたる中に道とゆふ、道路とゆふものがある、すつきり一やしきにするわまだまだ一寸にはいかん、ほんのいさゝか尋あい、いさゝかの事なら尋る迄、たすけやい〳〵なら何時でもゆるしおく、尋るまでたいそうの處、せかいにもならんなんぼでもできんよりてこれをよふきゝわけ。

△押していさゝかの處は何時でもゆるしおくと仰せ下され、たいそうの處ぢつとしておくよふ仰せ下さるが、なる處から買求めさしてもらいまして宜敷や御願

さあ〳〵幾重にもきゝわけにやならん、いくゑもさとしおく、ほんにたすけあい、いさゝかはどふでもこふでもよせにやならん、心から心はこんできたなら何時でもたいそうはどうでも道の理によつて日がくる、ゆつくりたがい心でいそいでかゝれ〳〵。

△前々刻限の御指圖に付高き事情とゆふ處一寸申上御願

さあ〳〵何かの事情〳〵、みな尋る處、もふどふでもこふでもみんな一人ものこらずふさんなくきく處、一人も不足ないなあとゆふ日を定めて、夫より尋ねにやならん、どふでも早くたのしみ、萬事たのしみ定めてやる、たのしみ定めたらほんに道の理とゆふ、早くどふでもこふでも人の處は一人もふさんなきよふ、はや〳〵いそいでかゝれ。

△明治三十二年一月二十六日西浦彌平氏身上の御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、どふもかはつた事情、よる〳〵身上さわる、ひるはよい、日々の處事情〳〵尋るからしいかりさとす、よる〳〵どふも早く尋ねでた、はじめて長い年間、それ〳〵しいかりうけとつてある、うち〳〵の處ことしもこれもとふりたる處、身のところからさしづする、年あけたらせき〳〵、別席をしてこふ〳〵きかせ〳〵、さあ〳〵尋る〳〵年あけたら順序一日一席、ぼふちよふ一日もかゝさず、一日も早く〳〵〳〵きゝとれ〳〵、さあ〳〵ぼふちよふきくのや、春になつたらこの順序はやく〳〵。

△明治三十二年一月二十七日桝井おさめ胸つかへせつなくなるに付御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ身上心得んとゆふ、事情尋る〳〵、事情には一つ順序、萬事一つ理をさとしおこふ、身上心得んから尋ねる、みんな治まりのふても治めにやならん、身上からたのしみ、どれだけたのしみありてたのしもとおもへども、身上事情ありてたのしみなろふまい、心よりよで日々にくになる、心とりよでたのしんでいればたのしみ道ある、又中に身上から尋る、身上から尋ねてさしづ治まりたる上、しよふらい心なくばならん、あちら身上かゝる、こちら身上かゝる、事情から萬事さしづおよぶ、みんなのそふ中たれかれ〳〵ゆはん、みなそふ中〳〵、世上には元といふてみんなつれかへる

〳〵り、この理きいている、日々はこびつくしている〳〵、心とゆふ理をはんぜんわかりて、わかりてありて日々おこないにくい、みんな心といふ、みな心とゆふ、そこで人々ほどのふもどる、人人そろた中〳〵、何でもかでも一時さとさにやならんりある、どんなものもこんなものもわからんものあらせん、わかる中にわからん理ある、その中何人そろて何人そろはんとゆふ事ではならん、そろた中でなくばならん、そこで筆にとりてはある、何人きいたばかりでは又きゝちがいありてはならん、どふゆふさしづありた、こふゆふさしづありたゆふたばかりではならん、理にそまらねばついにうすうなる理でならん、うすうなるからそも〳〵理はじまる、その理早くとりしまりてもらいたい、これだけさとしたら身上からの事情、尋ねたらこふゆ

ふさしづありたと、しよふらい治まらにやならん、ほんのそふとそのばぎりではどうもならん、これだけさとしおこふ、尋る事情はあんじる事いらん、あんじたぶにはならんで。

△明治三十二年二月二日夜前のおさしづより一同打揃うて願出の御指圖

さあ〳〵〳〵一人〳〵、さあ〳〵しつかりと心をしづめて聞よ、心しづめてきかにやわかりがたない、一人もどふもあれこれ〳〵ではとんとどふもならん、何度〳〵の事情にもみなさとしたる、みなそろうてとゆふ一つのり、なによの事もさとして、是迄どれだけの理をさとしてもすみからすみまでの理がわからん、是迄どふなりこふなり、よふ〳〵たちきたが、べつだんかはりたはなしではない、一手の咄しでつたゑにやならん、

どれだけさとしてもほんのその時丈の心だけではどふもならん、一人も不足なくはこぶ事情、何よの事も一つになつて順序はこんでくれにやならん、まん中きいてしまい聞ず、初めだけではどふもならん、どふゆふ事を尋ねかけられるやらわからん、尋ねかけられてまち〳〵ではどふもならん、一時の處だん〳〵日々つれもどるものに、とふい處はる〴〵順序もつてもどる、出てくるものに是迄にさとしたる、一人のものも十人のものも、すみからすみまで一つの心はこばにやならん、順序ある一つの理ならほんにとゆふ、しあんとゆふ理そらにある、まち〳〵ではどふもならん、この理しつかり聞分け、むつかしい事ゆふやなし、是迄順序の道にまん中きいても、するきいても、しんじつからきけば分る、たゞ一時とゆふはわからん、萬事一

とゆふ、二とゆふ、三とゆふしつかりこの順序聞取れ、何人のはなしいつきいてもかはらん、同じ事世界一度にうつる日があるで〳〵、あつからゆふやない、それではどふもならん、さきからゆうておく、是一つ順序しつかり聞てくれ、又よる〳〵刻限はなしした處が、あちらこちら聞さがし、聞きかぢりではどふもならん、一同集會をしよふやないか、した處がわからん、その時だけでは萬事おくれる、一度さとした理なんどの理にもさとしたる、取きまりた處もあざやかならん、日々別席とゆふてしてゐる中に、おらちごてるとゆふよふではならん、一つに聞かさにやならん、是迄の處はなししてゐる、萬事むつかしよふでむつかしない、すつきりあらため、一二三とゆふ順序しつかりつたへてくれ、是丈のはなしやない、まだつたへんならん

事情かず〳〵ある、是だけ一時のしきりとして點を打てしまう。

さあ〳〵〳〵〳〵つたへにやならん〳〵、さあ〳〵つたへるはなし〳〵、どふゆふ事をつたへるなら、是迄の處にて順序の理はみんなしりている、一時の處はどうもとふりにくかつたやらう、四方正面かゞみやしきとはじめた、かゞみやしきどうゆふかげがうつりたか、かゞみやしき〳〵どこからながめてもくもりないのがかゞみやしき、どふもならんみんな人間心をもつてとふりたどろ水ばかりであつた、だん〳〵すつきり掃除せにやならん、どろ水出てあとすんだみち、どふなりこふなりどろはどろでかたまりた、どろの中から何程の事ゆふてもきこえやせん、どろはおそろしい、どろはどろだけでしずんでしもたら地

のそことゆふ、だん〳〵幾重のさとししても、どろがつよかつた、どろのさかりは何にもたのしみもない、よるよる何時間のひまをつひやしたとて、どろにどろますばかり何もならん、どれだけのどろでも、どろはしづんでしまう、ういてはならん、あと〳〵どうなりこふなりすんだといへば一つのたのしみ、あと〳〵今夜聞分けねば分りがたない、そらをおもはんものはない、そらばかりみてはふみぞこなう、しゆんとゆふ道とゆふ理がありてそらどゆふ、みんな心におさめてくれにやならん、この理聞分け、くどう〳〵のはなし、ぜん〳〵よる〳〵にも一つのさとしがある、おそく〳〵時すごし、なんぎくろうさむき不自由の處から、よふ〳〵の中、どろはどふもならなんだ、そんならおまへはどろやからとゆふたものはない、なれどどろはど

ろ〳〵と出てしもた、さとりではわからん時旬をまつて、今日の日分るか分らんか、よふしあんしてみよ、世界あきらか一寸見えかけた、これから人中そろうて一つの心なら、日々つくす理は年々にみえてくる、末代生涯の理になるとしらしおこふ、是迄はなししたことはない、今日は一人ものこらずあつまりたる、まあこふして始めかけた處、人中としてはじめた、まあたのしんでくれにやならん、是迄人が出世すればねたむものはそりやない、なれど心に理をおもはねばねたむも同じこと、人の出世はたのしんでくれにやならん、ほんにこれでこそ道の理かとたのしんでくれてこそ道であろ、人の出世うらみそねみは道でない、そらをみてそらの理をたのしむなら日々日々近づく理である程に〳〵、是一つ聞分けてしつかり心にむすんでくれ

るよふ、聞たらほんに是迄は取ちがひとさんげせにやならん、二十年三十年あとき〻分けばなるほどと分るやろ、日々つくしはたしたものはなる處からそだて〻やらにやならん、なるだけのせわせにやならん、めん〳〵のものわけてやればおちるためしはない、もんかたない處から今日の道といふ、うそはあろふまい農家のりゆうけいつくるも同じこと、なんぼのたのしみとも分らぬ、世界中からこの景況見ればなんぼのたのしみつもるやら分らん、なんでもないはなしのよふに聞いてはなろふまい、身に不足かさなればどふもならん、これよふ聞分けてくれにやならん、さあ一點を打つて一つ事情。

さあ〳〵咄しかける〳〵、どふゆふはなしする、こふして今晩はなしかける〳〵、みなそれ〴〵一人〳〵咄し、是迄の處別席

してる處、まあとく處〳〵、あれもこれもあとやさきになりてはならん、今晩實を定めてしまう、何から定めよふ〳〵、そうじやなあ〳〵、さあ〳〵此屋敷から定める、人間はじめた元のやしき、これは日々さとしている又人間はじめた親里〳〵、みなつれかへる〳〵始め又しまい中があとになつてはどんならん、順序定めてしまう〳〵ときさとす、順序元なる咄し、元なる處一代あと〳〵この一つ元のやしきのためたてかはる中々もつてこんなんをさした、こんなんをさしたはゆふまでわからん間は、そんなものその中の道こんなんをさした〳〵、子供までこんなんであつた〳〵、もう一人はくれてあとへのこりて、これがだいながらへての道すぢ、子供〳〵みな道の爲めこふしたのや、第一とゆうあとやしきの理からはじめかける、人間一條

のどふり、神一條のどふりあとさきになつてはどふもならん、こんなんの道から先そうしていよいよこふなつたとゆふ處、さあ〳〵こんなんが第一、又一つには人間わが子迄も壽命さし上げ、人をたすけたいは第一ふかきの理、これ第一といてゐるといてゐる中に、たすけてもろたにんはまめでいる、たすけてもろただけでをんはしらん、年は何十何才さとしている、今迄はたゞこふゆふ理で助けたとゆふ理しかととかなんだ、我子までの壽命までさしあげて、たすけてもろた理はすつきりしらん、なんぞ道のためつくした事があるか、理のさとしよふで道の理がころりと理がちがうてしまう、ほんにたすけてもろたこうはない、ゆはゞほんのたすけぞんのよふなもの、我子までもなくなつてもとたすけた人の心これが天の理に叶ひ、我子までもさ

しあげてたすけてもろた恩わからん、世上からみて何をゆうぞいなあとゆふよふになる、にんがたれ年が何十何才はゆふ迄やなあ、たすけ一條のだいとゆふこりやさとさにやならん、とふく處やない、ほんそこからそこへやたすけてもろた恩をしらんものを咄しのだいにしてはならん、あら何をゆふぞいなあとゆふよふでは大にまちがふ、助けた心は天にかなひこれはさとさにやならん〳〵、どこのだれそれ何十何才まだぞんめいでゐるといふ、そのものどれだけの道をつくしたか、みれば世界につくすもの一人もありやせんで〳〵。

さあ〳〵フン〳〵〳〵、さあ〳〵それはそんならこふしよふ〳〵、我子ひとりなくして助けてもらひたい、これは世界にもふ一人もあるか、これははなさにやならん、どこのたれそれい

くつ何十、まだぞんめいまでもとゆふ理は決してさとさんがよかろう〳〵、さあ〳〵そふゆふものならたすけ一條の道理はこふゆふ道理、ぢつさいの事さとさにやならん、是迄といた處みたいなあ〳〵、みた處がそのものなんのつくしかたもなく、何ぞいなあとなつたことなら、ぢつがたゝん、ぢつがぢつにたゝんとすれば、ゆはんがよかろまた〳〵一つ。

さあ〳〵あら〳〵の咄しこれにじゆんじてくれにやならん、もふざつと代は三代、あとは今の事情四代とゆふやしきにすんだり、こりや屋敷にすんだ一つのり、子供何人なんにも不自由なきものであつた、道についてのこんなん不自由だけはさとしてくれにやならん、ほんにそうぢや〳〵、道についてこんなんだけはほんにかわいそうな日があつた、なんでもかでもはんぜん

さとさにやならん、こりや道すぢ、此道理をさとさにやならん、もふ代々かはりて一寸四代目のよふなもの、是迄の處たつたあとあとさき〴〵みんな順序さとして、それからこふなつてどふなつて、この道といふなんでもかでもさとさにやならん、そうかへ〳〵さとしましよ〳〵、一代はこう次一代はこう、あと一代はこふ、何代のあとこんなんの道すぢはこふであつた、年限の道とゆふは分るものもあれば分らぬものもある、分らんものに咄しするは、日々咄しの道すぢとゆふ、さあ〳〵よふ聞分け、道すぢの咄し〳〵今とゆふ今からはなしかけたのやない、ふるきはなしにもしてある、日々さとする理にもあら〳〵はさとす、何代あとこんなん事情は三代、男は男だけの理、女は女だけの理がある、子供は子供だけの理はといてくれにやな

らんで〳〵。

さあ〳〵今一時のはなしはだんじやい〳〵、だんじから理をくみたて、さとす、しつかり筆につくしてくれ、三十五年前こんなんの道しつたものもあれば、すつきりしらんものもある、三代あと〳〵子供はこんなんの道であつた此道つけよとてあるものは人にやつたり、もろてもらい、人の中へ出られんよふになつたのも道のためになつたのや、ほどに〳〵よふき、わけてくれ〳〵それより咄し三十五年あとよりはじめかけた、なんでもかでもはじめにやならん、だん〳〵一寸はじめだした、一人二人あちらからこちらからちよい〳〵心よせかけたる、一時はじめかけたる、それまでさんけいもなく、日々事をはこぶとゆふ事一つもなかつた、世界からあんなあほはない、みな人にやつ

てしもて、あとどふするぞいなあとゆはれた日、なんぼこしたやらわからん、三十五年あと、九月十月以來道すぢ、杖柱として理をはじめかけた、どうでもよいと思てはならんまちがいありてはならん、よふき、わけ二十年以來は日々はこぶものもありて、どふなりこふなりよふ〳〵おふくなつた丈けで、みんなつまらんなあとゆふたはふしとゆふ、ふしから一つ〳〵のめが出た、是からさき〳〵の處どんなふしがあるともわからん、なんぼふしがあつても、あんじる事はいらん、杖柱のこしてある、又さしづする人間のことばとおもてはならん、うつしこんだる杖柱とおもへば、何もあんじる事はいらん、是一つさとしておかねばわかりがたない。

さあ〳〵又一つ、是迄といふははたらきぞんにはでけん、はた

らきぞんにしてはならん、はたらけばはたらくだけ一つおだやかになつたなあとよろこぶだけわきもうてやらにやならん、よふこそとゆふて言葉のまんぞくさゝにやならん、みんな一つあざやかならん處、あと心にたのしみもつけてやらにやならん、こゑするのも同じこと、ほつておいては植ゑながし、しゆりせんも同じことと、一つの理にさとしおくから、みな〳〵よふきゝわけて、一時におさめてくれにやならん、是迄年限そうおふのたのしみはみなつけてある、たのしみの中にくるしみはめん〳〵心の理、かゞみやしきから打ち出す言葉は天の言葉であるほどに、理をおそれずあんな事ゆふ、あんな事とおもへばあんな事になる、めん〳〵身上もあんな事になるほどに此一つのりをさとしおこう〳〵。

△明治三十二年二月四日金米糖の御供の事に付世上に色々風説且注意も有之に付如何心得迄御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、何かの事〳〵みんなこれ世上にはひろい中、勝手のものあつてかつてする、勝手はどうとも一つもゆはらせん、なるほどゆふたて、何もおめもおそれもするやない、尋る事情にこたへどふゆふ處からどふ事情尋ねにくるとも分らんとぜん〳〵さとしたる、それぞれ心へとして心得にやならん、日々の處ごくといふ、ごくといふそれ致す、又さき〳〵の處とゆふ、さき〳〵の處ではどふもならん、二つ三つあくとゆふあくがよつてすることはどふもならん、わるい事わるい心もつてするからこのふせぎでけん、そこで内々心一つ〳〵一つにもつとしらんもの、何をどふしたるこふしたるもたずどこで

どふいふもの、どふしてかつてわるいものどふなあとしてこふしたらこまるか、又ないよふになるか、なによあく風よつてする處、たゞ一つの所からこふとゆふ一つ會議とつてはこべば、一手はきれいなもの、わる勝手はならんごくにしてくれ〳〵、それ心へでけん〳〵わづかはきいしりわかる、なれどおふくの中なんともわからん、さげるもの一手にして、これよりたよりない、いつ〳〵はからいとりあつかいせんよふ、名稱かづ〳〵たにあつかはんよふ、又でける處きれいならゑへ、これ一つきまりて早くするがよかろふ、おふい中注意とゞかんおふき處おふきゆいつけてするがよい。

△押して大き處分教會へさげさしてもらいます

さあ〳〵とふぶん〳〵の處、何でもかでもそふゆふりより、とりしまることでけやせん、めん〳〵こふとなりたる、とりあつかへこふゆふ事になあてくるとそれだけちゆふいするがよい。

△明治三十二年二月十八日寺田半兵衛家内まつ五十五才身上御願（一昨年よりあるくといぎどしくものをすると胸先へどうきうち、身にふるい出で昨年夏のかゝりよりだん〳〵ひどふなり、又此頃では追々せまり顔色あしく五六日以前よりせき出で候に付御願）

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ身上心得ん事情尋る〳〵、さあ尋ねば事情も一つさとしよふ、しいかりきゝわけにや分らんで、身上せまる〳〵、心にたよりないとさあおもふ、又たよりないとしかおもはせん、とりなをせ〳〵、よふきゝわけ、めん〳〵

内とゆふはどふも何をすれどおもへど、とんとなあとおもい〳〵年とれたる、日々わすれられん、これおもうばかりではならん、ころりと取りなをせ〳〵、じゆよふ〳〵とゆふ、神の道はじゆよふとゆふ、じゆよふとゆふはどふゆふ事なら、おもふよふなるもならんもじゆよふ、よふきゝわけ、なす一つ理聞分けて何ほどたぶんものがあれど、なんのたよりになるか、何もくやむ事はない、日々たのしみの中にならん理をみよ、これめん〳〵でなるかならんか聞分け、内々きゝわけ、これまでの處どふゆふものである、こふゆふものである、中にきゝわけ、身上せまる處、とりなをせ、今日といふたのしんだ理にたのしみないと、一日たづねた日からすうきりわすれてしまへ、どふなりこふなり日をまつて道といふ道はあるほどに、あるほどに、これよりどふなろふとゆふ處から道ついたら、これが道、これで何もたのしみあるかないかきゝわけ、一つ道見えかけたらつく道があるで、又めん〳〵いんねんきゝわけて道治めるなら何でもかでも道でる、なるほどふじゆみれば、身にこたへもない、なすいんねん聞分け、いんねんむつかしい理とおもふな、ほんにどんぞこからいけ〳〵、それからたのしみ、身上あんじる事いらん、あんじてはならん、なにくうたくなく〳〵、なるかならんか、もふ一ど〳〵なるかならんか心に治めて、さあたのしめ〳〵。

△明治三十二年二月二十一日(舊正月十二日夜)政甚様事情に付、清水、桝井、梅谷、平野の四名段々御運び下され、大工、農業、商業の三點の内、本

人大工と申され候、結局教長様へ申上、其上本席
様へ御返事申上下され候時、是れで道が立つ十分
やと御喜び下され、四名の者へ仰せ下され候に、
三點の内政甚が大工修業すると申せしは、わしは
もふ満足する、此きまりたとへ三十日でも
まもりてくれたら、あす日どうなりてもかまはん
と嬉し涙にむせび下され候時

さあ〳〵今日の日まちかねた〳〵、今日の日がなくては道の理
はどこにあるぞ〳〵、今日の事情二年三年あとであつたらあつ
かうものもない、又にんの心にも理はまもる事でけよふまい、
是迄とゆふは土の中におぼつてあつた様なもの、まちかねた
〳〵、これはたれがしたとおもうか、一年一度のみな世界から

かへりくるのにでるとゆふ、これは一つのふしともゆふ、どれ
だけの理であるか、たれがしたのぞ、たれがしたとおもふか、
みな理でなつてくるのやウハ……、四名のものしつかり聞い
ておけ〳〵、この日まちかねたのや〳〵、どふにもこふにもこ
のまゝであつてはどふにもこふにもならせん、道の理がたゝせ
ん、さあ二代大工とゆふておく、年限は五年これはしつかりし
た定約、これよりかたいものはない、此の一つの理はどんな名
人でもほどくことでけん、そこで又こくげんの理でさとすこと
もある、その日しゆんがきたなら又その理よりはこばにやなら
ん、さあ〳〵眞柱にもちゆういしてくれ、二代の理とも三代の
理とも分らん、さあ〳〵いさめいさめ、いさめば何ほどけつこ
ふとも分らん理であるほどに、一時大工〳〵杖柱にしてとふり

きたとさとしたる理もある、よふ眞柱にきかしてくれ〳〵。

△明治三十二年二月二十四日城島分教會長上村死去

以來眞なくして、只今の處總整理員としてありますが、其後任定めるに付て元上村の系統に致さんならんもので有升か、又は役員の重達た者で定めて宜敷か、役員同等のもの澤山有升が如何に致しまして宜敷か増野氏心得迄御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあはじまり〳〵、さあ始まり〳〵、さあ〳〵始まり〳〵、一時以て教會とゆふ一つ名をおろす〳〵、元々理とゆふ中に理とゆふりある、これからみんなそれ〳〵本部員一つ理もつて順序けんきうの始め、會議とゆふこれがどふりか、それがどふりか、これ定まりたらみな順序世界といふ、この事情一寸さとす、あちらにも分教會こちらにも支教會、出張所、布教所順序よりとゆふ、一つ元ありてさき〴〵とゆふは、みなつゞいて今の日、萬事あつまる處さき〴〵あつまる、一時今日とゆふ、あすとゆふなら中どふせへとはゆはん、順序々々理とゆふはなしかけたる、さとしかけたる、この理から治めるならどれがいかん、これがいかん分らんから道世界り、理は地場とゆふ世界いくすじもある、西もあれば東もある、北もあれば南もある、四方八方是一つ聞分け、たゞ一人ひよこりはじめて、元は一寸したもの、その理からだん〳〵ある、よふきゝわけ、なるほどつなぎなくばいかん〳〵、こらつくした理はしようらいの理にうけとる理とゆふ、みなもとゝゆふ、何かなしにもつてくるものはない、よふきゝわけ、三才の

ものも同じ事、生れ子も同じ事、よふきゝわけ、生れた時は親はたれやらかれやら分らんなれど、年限わかりかけば親とゆふ事が分る、順序治めてくれ、心へだんじ今一時教會事情たづねた處、そのまゝよし〳〵とゆふてはじめ、その間に半季やそこらつい日がたつこれ一寸さとしおこふ。

△本部員談示なり分教會一同談示致しましてと御願

さあ〳〵まあ一つ地場順序より、それ〳〵日々つとめやい、又一つはなしやい、なるほどこれが順序やなあ、又先々一つ理をあつめる理がなけにやならん、さき〳〵たいもふあればみな元はちいさいもの、元におふきい理あらせん、だん〳〵さとせば分る分ればこれが治まりであろ。

△又おして

さあ〳〵これきゝわけにやならん、どれだけたいもふな事心つくすはこぶ心一寸したはなし、一寸した程からなりたあたる、よふきゝわけ、何程いやしいものとおもへどもゆへど、元とゆふそのもの尋ねて一つ事情、よにいつてどちらへいてよいやら道が分らん、時に三才の童子に尋ねて、三才の童子にでもあちらこちらと尋ねばくらがりといへどわかる、何程へんじよふな分らん處へいたとて尋ねても分らん、その時あゝちこふちとゆへばわかる、これだけさとしたら萬事このとふり。

△明治三十二年二月二十七日西浦彌平氏五十六才身上御願

さあ〳〵尋る處〳〵、どふも身上に心得んとゆふ理を尋る

〳〵、めん〳〵に身上に心得んの事情あればなるほどとゆふ、理ゆふまで治まるおさまる身上心得ん、内々めん〳〵はゆふまで理をあんじる〳〵、よふ聞分け、理をあんじてはならん、内々にも理をあんじてはならん、ぜん〳〵身上からさとしおいたる事がある、一時日々席とゆふ、席々にぼふちよふとしてきけとゆふ、年があけたらさあとゆふ、席にとつて筆をとつてつけかけ〳〵、これまで〳〵これまでつたへたるところ〳〵かげからはこんだ理は十分うけとつてある、理によつて今日のさしづからそれ〴〵とりつぎ〳〵一つ理をむすびこめ〳〵、今日からむすびこめ〳〵、あいかはらん日々つめあい〳〵、身上の處あんじてはならんで。

△押して日々むすびこめと仰せ下さるは詰員として
つとめて貰ひましてよろしきか

さあ〳〵もふこれ日がをくれたる、一日日をもつてさとすからむすびこめ、同じ理もつてむすびこめ、同じかはらぬよふ本部員〳〵〳〵。

△明治三十二年三月二日本部大裏の土持當村の宮池
より土をとりて運ぶ事御願

さあ〳〵尋る處さあ〳〵尋る事情は、さあつちもちや〳〵、一時もつてつちもちとゆはん、とき〳〵しゆんとゆふ、世界まだあるか〳〵わしもいこふ〳〵、そらいつからそらじゆんかいな、世上まちかねる日がある、どこからどふと一寸ゆはん〳〵その心ではこんでくれ。

△押て

さあ〳〵まあ〳〵一時の處あちらから一寸、こちらから一寸〳〵、これ心へてあちらから一寸〳〵、こちらから一寸〳〵、みな元とゆふ一時どふしよふこふしよふそらでけんではない、なれどでけるよふなあつたんは、何かなしになつたんやない、皆しゆんがあるで、世上にのこして〳〵道ある、さきの道まつて道の順序はこんでくれるがよい。

△明治三十二年三月二日櫟本の梶本みきへ身上の御願十七才

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ身上にどふも一時みればどふもならん、なんたるとゆふ一つ理よふ聞けにや分りがたないで、どふゆふ事もこふゆふ事もみな身上とゆふ理からさとす、さとしはきゝよとりよふでころつとまちがう、さしづどふりなんのまちがふ事あらふか、みな子供〳〵あちらへだす、こちらへだす〳〵、よふきゝわけ、どこへかしこへをふこして、どふなりとどこにもなあかしこにもなあおもふ心ちがふで、なあたいて〳〵そのうへなんぼあつたてあかせん〳〵、どのくらいどふしよふとゆふてならん處きゝわけ、ふかい處いらん、みなひとゝふりあればもふ十分、その心もつてこれからさしづのりにもとづくと定め、さしづにもとづいてどこに不自由あろか、ふじゆふはない、みないんねんで順序理がある、この理きゝわけ、あんじる事いらん〳〵、そこでさしづどふりのないものにあるとゆわんで、さああんじる事いらん。

△明治三十二年三月五日御本席様一年程前より左の

耳聞えんに付願

さあ〳〵尋る〳〵、さあ尋る時〳〵時をもつて尋る、どふもこれもながらへて身上に心得んとゆふ、かねて〳〵一ついかな事とたに事情もおもはにやならふまい、どふもさわがしい、みゝに一つのりが分らねばどふもならん、どふなりこふなり、日々の處それ〳〵運ぶ處の事情、又一つには席とゆふわかりありてわかりない、半分わかれど半分わからんとゆふ、尋るから一つさとしよふ、半分わかりて半分わからん、どふゆふものであろふ、これまでとゆふはどふもこすにこせんとゆふ、どふりからまれてとんとどふもならん、どふなりこふなり何事もなくして今日の日なれど、日々さとす理よふきゝわけ、しよふとおもて

もならん、しよまいとおもてもなりてくるりをきゝわけ、あら〳〵わかりて代々とゆふ、もふ一だんのりにならん、どふゆふりであろふ、さしづをとつてはなしの中とゆふ、その時のばはのがれる、日がたてばとんとどふもならん、もふほどのふさしづとふりにして、ほんにとゆふ一つ一つおさまるなれど、日がたてばとんとどふもならん、それ半分〳〵である、すうきり分らんよふになればどふなる、やみのよにほふがくうしのふたのも同じ事、いく名それ〳〵何人の中といへど、この道はたゞ一つの道であつて道に二つの理はない、なれど一つの心にどふとゆふ理をもてばどふもならん、それはそふやなれどこふとどふりを出しては一つの道とはゆゑん、もふ何ケ年たつたらどうなるとゆふりもさとしおかにやならん、まちがふたら順序大へん

むつかしい、とりよふがちごふてはならん、ぜん〳〵さとした理よふ〳〵おさまりたる、めづらしい事がでけたなあなる、ほど〳〵つゞくが一つの理やと心にもつてくれにやならん、よふきゝわけ、どふりのわきまへでけんあいだはまあ三才の理である、三才の理といへば心がうかめばにま〳〵とわらふ、きにあはねばむりをゆふよふきゝわけ、半分わかりて半分わからん、どふゆふものとおもふやろ、理をきゝわけてくれたら分らんやない、めん〳〵きゝわけて心にしやんしてくれ、もふよいかげんになあとおもふた、どふでもこふでもあと〳〵つゞく理おさまりかけたる、ほんにこれもかわすことでけん、一つの道ならいつ〳〵までさしづの理はたがはせん、はじめてをしへかけたいつ〳〵り、心に理をたがはせばどふもならん、人は神とゆふ、にん〳〵めん〳〵におもふから人は神とおもはん、神とおもへばゆふだけの理をゆふて、めん〳〵の心にはまれば理である、そのまあがむつかしい、さとりでは分らん、幾度尋ねてもあらいきらにや分らん、よふきゝわけてくれ、まあ半分わかりて半分わからん、これがさつぱりわからんよふになれば、とふるにとふられんこれきゝわけてくれ。

△明治三十二年三月十八日東部内深川支教會部下高崎出張所役員新井萬次郎身上御願三十二才

さあ〳〵尋る事情〳〵、事情は身上一條理を尋る、いかなる事であらうと日々の處、まあ道の爲とゆふはよふいならん心〳〵、どふなりとなつてこれからとゆふは身上一つ、よふこの一つりをきゝわけて、それ〳〵順序とゆふ理をこしらへて道つ

とたる〳〵、道つたへてくれ、そらどふいふことつたえるなら、よふきゝわけ、さき〳〵あちらこちら名所〳〵りとゆふは、元々ありて順序又一つ元ある〳〵、元から元の順序のあらためて、順序よふきゝわけ、をふい中、古い道わすれてはならん、をふく中どふゆふ事でけるも、さき〴〵治まりいる所、古い道ありて新らしい道〳〵、さき〴〵さかんといへば古い〳〵古いふしのふてはならん、さき〴〵の所どれだけの道でけるも、せんぐりむこいいた處があつまる處うしのふてはならん、これだけさとしたら順序ある、元から元さきからさきの元も元の元ある、その道うつとしいとならん、うつとうしい中しいかりきゝわけ、元々だん〳〵元元の元、又元があるこの順序さとしおく、分教會とゆふ名所、それ支教會出張所布教所とゆふ二

つ三つ元々一つとゆふ、その古い道わすれてはならんさあ一點筆とれ。

さあたとへてはなし、さあにはさきにある植木にはみきはふといとて、一の枝二の枝、一の枝とつて何ほどめづらしいとゆふても一の枝とれば元何もならん、これからだん〳〵きよのさとし、元はじまりてこの日、何でもかでも元にきかさにやならん、にはさきにさとしたる分教會一の枝とれる二の枝とれるさかへん、さあぜんさとしたる、元そだてばそだつ水がふくむ、よふきゝわけ、これはよふいにならんさとしやでにくいさとしやない、かわいからさとすのやで、さき〳〵身上事情もつていけばたいせつない事情、古いものそだて、さき〴〵身上順序さしづ聞いて、あぶない〳〵たづねるさとしてさとす、元がうつ

としてさきになにゆふてもならん、さき〳〵くやしむこれだけさとしたら元はよふいならん、よふいならん枝がある〳〵、元みきとゆふ枝はろたら野中のくいも同じ事、よふきゝわけてくれ、身上事情尋る事情はさとし一つの理になるとさとしおこふ。

△明治三十二年三月十八日清水與之助氏身上御障り
に付以前御指圖より夫婦共本部の方へ勤めること
定め御願

さあ〳〵尋ねる事情〳〵、年限といへば一年〳〵、長いものみぢかい、つい〳〵たつ、どふしよふとゆふてる間にたつもの、ぜん咄したるものまちがひはさとしてない、理がおさまればしんのりさとしたるり、三年といへば三年五年といへば五年おもていりや心のりきりない、ぜん〳〵あちらひながたある、こちらにもひながたある、みなかたまつて順序よせたる、さとしたらその心いらん、心いらん〳〵、この心にふうふとももとづいてくれるよふ。

△押して夫婦共本部の方へ勤めさしてもらうよふ引
越して分教會の方を治めさせてもらいます

さあ〳〵何時なりと〳〵、一年まへさとしたる、一年まへおくれたる、心何時なりとぜんによせてものふうふともたちならんで聞いたら、わしはきかんとゆはれよまい、聞きちがいおらそふやないとゆへまい、さあなんどきなりと〳〵。

△増野氏分教會一統へ咄し致して事情運ぶが爲出張
さしてもらいたすと御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、萬事の處これまで〳〵何かの處つなぎやい、つたへたる道みんなまんぞくさして、なるほどゝゆふ處一つをさめてこい〳〵。

△明治三十二年三月二十八日前御指圖より教長樣へ

御伺申上げ、其趣きには婦人會の處何かくいきをたてゝ何かと名前付けまして宜敷ものかと御願

さあ〳〵尋ねる處〳〵、尋るまでの事情〳〵、さあ〳〵まあ一寸はなしかけたらあちらも一寸わかる、こちらも一寸わかる、わかり〳〵の理よせたら、どんな事もわかる、これまでなんぼまつた處がもふであろふか〳〵と、まてどもどふでももふその日〳〵とおもへどもおくれ、これで十分とおもていたらならん、此地場とゆふせかい〳〵ところ〳〵はじめ、何も一度ではじめたんでない、一人から又一人、一つ〳〵はじめさきはゆはいでも理に分りあろ、ところ〴〵とゆふて此道かゝり、よふおもてみよ、みな一日二日又三日とゆふ、一度でけたものであろまい、年限ででけたもの、これから一つくんだら一つあたへ、二つくんだら二つあたへ、このりきゝわけ、國々ところ〳〵とゆふかゝりはふわ〳〵したもの、あらなにゆふてくる、何をしてくるとゆふ、あんな事とゆふなれど、又年限ででけたもの、さいしよふあちらからとりわらはれ、こちらからとりわらはれ、おもわくどふりさしておき、それより年限のかたまりから、處々なるほど一寸あら〳〵分り、みな神がする元とゆふ、ぜん一つあちらから一人事情、こちらから一人事情、たすけ〳〵とゆふ、みなたすけ一つのりからでたものであろ、あち

らでもこちらでも所々名稱とゆふ、教會とゆふ〳〵、一時にでけたものやない、元くらがり〳〵からとふりていればくろふしたんも同じ事、これからみればほつておけん、ほんにさふであるかとこゝにある、いくたびさとした處がどふもならん、人間心いらん〳〵、人間心ですする事は一時はつよいものなれど、いよふとゆふてもいらるものやない、おこふとゆふておけりやせん、どうもならん、ぜん〳〵事情とゆふはどふもならん、人間心もつてだん〳〵はこぶ、世界にはしらん間はつよいもの、さいしよふはじめ、どこからはじめた、元もんかたなき處からつけた理おもいりとゆふか、かるいりとゆふか、かるいとおもてはならん、理はつよいものこれからはなししかける、しいかりきゝとれ〳〵、さあ〳〵はじめかけたる處婦人會とゆふ、一寸

これも一寸からはじめしゆごふからだしたもの、ゆいかけた處が半年一年はついおくれるやわからん、そこでしらん間世界何やらとゆふ處から助けはじめ、是迄つくした處りをすうきりうもれてある、こふして地塲とゆふて入込でくる處、日おくり事情なんでもないとゆふは何でもない、何でもないとゆふは人間心できたもの同じ事、皆これまでつくした理はそれだけみてやらにやならん、その日神のとりつぎ〳〵、それからみだせ、ほんに〳〵これとゆふはきれいなもの神よりさしづしたもの、神よりさしづしたもの何人ある、心とゆふりしらべ、女といふ子供よふしよふの時からくろふとゆふした中にかず〳〵あるかないか、ゆびをくりてかぞへてみたらわかる、さづけわたしたものもたくさんある、なれどたれかたすけた理あるか、これから

きゝわけ、女でありたけどほんにと治めたらどふかくすればできる、人がたらん人がたらんとゆふ事いらせん、わづかの處から事がたつてくる。

△御勤めに出る鳴物の仕方の順序

さあ〳〵これよふきゝわけにやならん、一時もつてそれ〳〵とりあつかへでけるか、それだけはたらいてる、今日のつとめ今日のつとめあたまかぞへてみよ、しらべてみよ、こふして始めかけたははじめ手をつけてあいだかはり〳〵よふきゝわけ、みなゆふにたれかれなしにでるとゆふは人間心からする事、神にたづねたらじつさいしてかす、それより人かずでよとゆふてでられん、たれかれとゆふて人間心だんじてした事どふゆふ事になりたるか、此屋敷中に聞いてゐる、むねにたたみこみ、どふかくのもの、人間心でうづんでゐてはならん、女であれど盡した理は元は神のもりから、これからのぼれたか、ほんになあ萬事けんきゆうとゆふ、これからすればつよいもの、つよいものでける、でけるものほつていて手がたらんたらんとゆふはわからん、そこでしゆんをみているなれど、何ともゆふものない〳〵、あら〳〵わかりあらふじんや女や、よふきゝわけ、男女わけてない、一寸〳〵心しらん〳〵、どうもならん、でけんものゆふた處がでけんなれど、年限ででけるよふになる、今日たねをまいて今日にでけん、しゆんを見てはへる實がでけるこれきゝわけ。

△押して願

さあ〳〵理をたつとめ、十分〳〵なんぼふでもたつとめ、こふ

のふがある〳〵、その理はけふにゆふてでけよふまい、この心もつてすればこふのふのりあらはれる。

△押してこのおかた〳〵とみわける事

さあ〳〵尋る處〳〵、さあ一寸わかりかけたらわからにやならん、此處おぢばはじめ席の處たぶんある、女のおかたに一寸席してもろた〳〵、これまでこふゆふ事とはよふしらなんだ、心さい定めてつくしたらけつこふやなあとゆふ、あらつみかさねたこふのふとゆふ、この道よふ〳〵の道つみかけたとゆふ〳〵。

△又願

又たづねかけた女であれどこふせんとおもてのきやすみのりとゆへん、教會本部役員とゆふりはこれは一寸なろまい〳〵、なれどどふよふの心は内々の心にあるめん〳〵の胸にあろ。

△手をうつてから又さしづあり

これから〳〵こふして尋ねかけてたづねかけるゆいかける、刻限しらしたらめん〳〵心にもつて神のはなしうたがはれん〳〵、はじめ一寸から何やら分らん處から、かんなんくろふの道とふり、日々もふさんとわからん、これしよふらいにきゝとつてくれにやならん、あちらからこちらからやらめづらし人や〳〵とゆふ、なれどときよの理でわかる、日々心のまがらんにごらん、こんな心とゆふ處年限のこふのふとゆふりをさしづしておこふ。

△又一寸してからはなしあり

さあ〳〵筆をとれ〳〵。

さあ〳〵まあ〳〵一寸はなしかけたら一寸それわかりかけた、さあたれはるすや、かれがるすや、これ一寸咄したい、もふこれ三名五名あら〳〵り、心あはせさしづとる限りにはこゞとない、又こゞとないものおらきかずとゆふ理はない、さしづとりておらどふやこふやそんな事ではならん、さしづとつてまちがいあるかないかしやんせ、此屋敷はどんなものでもたいせつしてやらにやならん、いかんものにはきかしてやれ、だまつていてはならん、きかんものはどふもならん、みんないる中によりようてる中にわからん處さとしてやらにやならん、さとしやいは兄弟とゆふ、きれいな屋敷神の屋敷にいて、つみつくりていてはかゞみやしきとはゆはん、つみ屋敷とはちつやゆはん、そんなりからならんよふになる、鈍なものは尚かはいがりてやれ

〳〵、これだけさとしたらわかるやろ、下ほどたいせつにせにやならん、道具とゆふはつこてあくる日まで紙につゝんでなをしておいて又つかうものもあれば、ほつておいてもあくる日だしてつかう道具もある、これだけ一寸神がはなししておく。

△明治三十二年四月十一日増野氏身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、身上に心得ん〳〵、理を尋る〳〵は順序りはさとしおこふ、いくたびさとし同じり、めんめんにとつてはめん〳〵には何もおもわくあろまい〳〵、みなあつまるにりとゆふよふきゝわけ、一名身のからだにこちらも同じ事、中にはたらくはならんなれど、ゆるきとゆふこゝろなくばならん〳〵、もふつかへつかへきつて〳〵りは一つとゆふりきゝわけ一名の處二名三名の處、この心もつて先々ながくもつて日々と

ふりはからいとゆふ、これ一つ順序とゞまる一名からたにあちらこちら、これやすまるりはない、一名二名きぶんわるい〳〵とゆふ、一つゆふほふとゆふ、あちらこちら三名もつてすれば心ゆふくりせねば長くいけばとふくのとふくの道りはやすうしてとゆふ、とくときゝわけ。

△二名三名の處をして願

さあ〳〵みんなそれ〴〵もみな日がら刻限もつてしらしたる、りをもつてよせたる、今迄遠く處でだんじでけん、これからきゝわけあざやかこれからつとめてくれるがよい、ながくは身のたのしみである。

△明治三十二年四月十三日永尾よしゑ身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ尋る事情には身のところはとんと

一日〳〵りがどふゆふものでこふなる、まあ今日よかろかとおもへば、あす〳〵よふ一つりをさとす、めん〳〵聞分けは第一り、又たにきゝわけにやならん、もふ事情とゆふは日々事情はたらきりは日々りあらかつてでしてるとそふ〴〵り、日々内に事情あればそとに事情ある、一戸一人ならなに事情なき事情、めん〳〵はこふとおもふだけこれからとつてよふ事情きゝわけにやならん、あらかつてでしているとおもてはならん、りはどこへおさまるともわからん、これきゝわけ、はこびやいつくしやいきゝわけ、一時どふしてなんのはたらきぞんとおもうなよ事情はしゆりこへとゆふておこふ、これわからねば風のたよりにつたへているも同じ事、ほんにあれだけつくせばこふのふなくばならん、よふきゝわけ、身上はあんじる事いらん、あんじ

てはならん、つくしたゞけはどこからなりとでゝくるほどに、さあつくしぞんにならんで。

△明治三十二年五月一日梅谷四郎兵衛氏の顔にもの

でき身上の願

さあ〳〵尋る事情〳〵、同じ一つのりを尋る、身上心得ん理を尋る、いつ〳〵のりは一つ心得のためりをさとする、一つのりみわけてやらにやならん、こふして中とゆふ、いかなるもはこびやい、それ〳〵萬事のりにある、身のところあんじる事はいらん、めん〳〵先々の處心にかゝる、心にかゝらんよふ、心はおもふまいおもふり萬事なんにも心にかける事はいらん、まかせおけまかせて日々の處第一の理である、こふなる一つ身上事情を尋た事ある、事情さしづ一點をうつて筆を取てくれ、この

道元々第一のりであるほどに、あちらでもこちらでもおさめかたや、教會名稱しるし、これも一時にでけたものやない、それからそれ〳〵心に一つのりできたるもの、心にさんらんするとゆふ事はない、おもい〳〵にもち注意一點のしるしから萬事とりあつかいのりをさとす、あちらこちら一手一つのりにならんにや心がいくすぢでゝ芽又芽、このめをかゝんよふ、ひとめかづ〳〵道の元、ずいぶんめをかゝんよふ、めからみがのる、たねとゆふ根にある、何の事であろふとおもふ、あじはいとゆふ、うまれたときのよふなもの、あまいもからいもおなじ事、萬事此りもつてかゝればそのりあまいからいみなをさまる、からい元とゆふみなにかの心のためにさとしおく、身上あんじる事はいらん。

△明治三十二年五月十日梅谷四郎兵衛氏の顔の周り
でき物出來しに付前御指圖にもとづき押て御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、いくたび尋る〳〵、さあ是迄長い間道すがらさとせどもわかつて道すがら、一つのり心次第の道、どふなりこふなりの道、一つふんばり順序りをおもふて運びかけたるりははこんでやらにやならん、萬事の處すうきりまかせおけ、地場に心よせて、これは十分身上いかなる事である、身上時々にたえられんとゆふであろ、よふきゝわけ、道すぢどふゆふ事でなりたつまで、どふゆふことも十々の理であつて、身上ふそくなるいかな處である、もふきゝわけ〳〵十分であろふ、めん〳〵ふそくなつたる、一寸わかりがたない、だん〳〵道すぢとふく道筋であつたらどふする、たんのふこれ一つ、聞分わ

からんながらへてどんなこともうけとつてある、これからながい事情あら〳〵おさまつて、たゞけつこふぢやわからん、みなの中じやこふゆふ事もめん〳〵身にくらべてそふぞふの中やで、日々の中にそふ〳〵の理をさとさにやならん、何ほどりに一つ、ひとつぼのたねをおぼる、たねをまいたる、そのかたとゆふてある、たねをまいたてしゆり一つのりで、又たねをまいてしゆりしやん、これはなんとゆふ、なんどきどふゆふりあつてなろまい、をゝくの中どふしよふこふしよふ、せけん一般の實のり、そふ〳〵たのしみなくして道があろふか、樂しみふせかへたのしみあろ一時の道をひらいてやらにやならん。

△押て本部にて日々會計の方御勤下さる事で有升か

さあ〳〵そふゆふ處へ心をはこんではわからせんで日々會計ど

ころの事やない、道が十分あつて會計別になるからしまり、道がなくて會計いらん、萬事の處さとしやい、こふゆふ事こふさとされて一つあらため、しつかりさとしてくれ、じゆんじよふ刻限もつてはなしよふがない、夜にさとしできん、よびにいかんにやわからんよふではさとしできん、これだけ一寸だけの事やない、一寸のさとしでないほどに。

△押して本部の上より部内の修理致し升事で有升か

さあ〳〵一會順序たがいにどふゆふ處はじまつたる、一りうのしゆりこへたねをぼつてしゆりじゆんじよふ、みな心をよせたれ〳〵、ほさ〳〵こんな道ではあろまいがな〳〵ウ……。

△しばらくして

順序ひとのめしゆりまでとりけしてしまい、めん〳〵かつてむ

すんでむさくろしい、神一條の道古いあたらしいこれ一つきゝわけ。

△又しばらくして

さあ今はどちらへこちらへ、こふしよふこふゆふたらみな〳〵でけてくる、たゞ一時できたものはない、だいは一ばん下である、これ一つさとしおこふ。

△明治三十二年五月十四日梅谷四郎兵衛氏身上の御指圖よりすうきりまかせてしまへとの仰せ下されるは分教會長を副會長梅二郎に任せる事で有ますか御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、萬事の事はいかな事も尋ねにや分ろまい、このくらいならとゆふよふな道のりではどふもならん、よ

ふきゝわけ、身上に一つの事情あればどんな事もをよぶまでのものやろ、どふしよふこふしよふと思ても身上に心得ぬ事情ありてはでる處へもでられんやろふ、皆のものに心配かけるよりしよふない、よふきゝわけ、ところをたちこし、近く〳〵まで一つ順序におふてきたる處、しいかりきゝわけ、もふ是所を立ちこし一つおさまりて順序の處、一つの名前をもつていれば萬事かゝる、たつた一つの理よりおさめば何もかまはいでもよいもの、これ一つむつかしい事はない、たゞ一つのりからでたものなら、一つの道の心になれば何もゆふ事はない、今の心とゆふりありてはどふもならん、今一時尋る事情らくとゆふりをしらんか、いつまでもおれが〳〵とゆふても身上に事情ありてはたのしみはあらふまい、身のおさまり道とゆふ、理とゆふ一つ

のそふだん、はしらにはちがいない、そこい〳〵の事ならそれにまにあはすがたのしみ、あちらこちら一つのりをあつめ、あちらに事情あればそふか、それはごくろふやなあとゆふて通るがらく〳〵の道であろふ、それで内も外もたのしみであろふ、なんでもかでもとゆふては心のやすまるまがあろふまい、この理ほんになるほどゝ聞分けて一つの心をもつてくれ、此席みんなそれ〳〵よりよふている、道のりはたゞ一つ人間どふしのりいもあろまい、よふこれを聞わけてくれ、今一時の處やない、ぜん〳〵たがい〳〵とゆふは心につみとゆふ、つみはすうきりはいしてしまはにやならん、とつてしまはにやなろまい、つみとゆふは道のりとはゆゑん、ならん事どふせいとゆふやない、もと〳〵よりよふたりをみよ、わからず〳〵ではあろまい、も

ふ一つの心も萬人の心も地塲に一つのりあるのや、同じ兄弟の中にあふのあはんのとゆふよふでは道をすつてんほかしてしもたも同じ事やで。

△今日押て前々梅谷氏の身上指圖修理と仰せ下され候は本部内らの事で有ますか又部内先々の事で有ますか

さあ〳〵尋る事情〳〵、前々順序さとしていつくわいとゆふてある、それ〳〵だん〳〵どふがよかろふ、一つのりをもつてあつめたる、むつかしい事はない、同じ兄弟内も外もへだてなきとゆふ、萬事〳〵是迄〳〵年限からはかれば三十年以來の中、二つにも三つにもしきりてさとさにやわからん、どれだけかしこいとゆふてなるものやない、どれだけべんしやとゆふてなる

ものやないあちらへこちらへにげあるき〳〵、たゞ心一つの理で通りた道、年限たてばあちらの理もわすれ、こちらの理もわすれただおもてだけの理になる、苦情がさかえて道がさかえるかよふきゝわけ、苦情あつて道とゆふか、それ二つ三つにしきりてあれど、古き道わすれてしまう、一つのりがふゑて、三つのものが四つにもなる、人間心の道になつてしまふ、まあいつぽしの處はどふでもこふでも三つ子の心、年限の内にはかんなんくろふさしたる、このりわからいでは人間心の道とゆふより外はない、此道とゆふは人間のしりたる道やない、ほんのほのかのりよりなりたつたもの、よふ〳〵の道である、よふ心にしやんもとめてくれにやならん。

△一先御引きになつて火鉢の御前にて御咄し

さあ〳〵もふひとこと、一寸一つかきとらにやならん、今日の一日の日をもつてだんじのりをたづねた、一つのり一點を打つたりからさとそふ、こふしていればさしづの間はみな一つの心、さしづ一つのりであろふ、ほんにこふせにやならんとゆふ處からひざをならべて尋るのやろふ、どふでもこふでも人間心のりはもちいる事はいらん、いらんはづや、人間心のりでつくりた道やないから、人間心はすつきりいらん、それ〳〵おふたものどふしの心をはこんでせつではおさまらぬ、さしづ一條とゆふりからもつていたら、一つの心にあつまる、あつまるからおさまる、一戸のうちでもそも〳〵で苦情ありては繁榮とはゆはん、まして元々世上はじめたる屋敷の中ならいふ迄のものや

ろふ、そこへ〳〵一つあつめて一つのり、どれだけそのばおさへて、はぶり切てもおさまりそふな事はない、あんなものほかしてしまはんならんよふなものでも、だん〳〵とふりた、つくしたりはほかす事でけん、萬事さとして理をよせる、かつてとゆふりはこの道には一つもいらん、同じ兄弟どふしなら兄おやとゆふ、地場一つの中にたがい〳〵苦情ありては世界のきこえはどふなるか、もふふるいものはほかしてしもたらとゆふよふではならん、西も東も分らんときから初めかけたる理が、第一ひとつかみにゆふてはいかん、これから古き道さらへてくれ、いかな事も分るであろふ、是一つが第一であるほどに、内々は仲よう〳〵いつ〳〵もかはらんなあとゆふが第一のり、世界からなるほどとゆふてつれかへるよふ、これをとりしまりてくれ

るよふ、さしづのりをもつてすれば苦情はなきもの、あちらがどふこちらがどふ、このりみてゐるにいられん、外の道と内の道とはころつとちがう、内の道が外へわかりたらあざやかなものであるほどに。

△明治三十二年五月二十五日増野正兵衛氏身上御願

さあ〳〵尋る身上から事情尋る、一名一人かゝりて事情、萬事のさとしいかなる事であるとおもふ、みなそれあいそうとゆふ、わからん〳〵から尋る、尋ねた事情はたれ〳〵の事やとおもふ、事情はならん〳〵やない、萬事わからにや尋ねやせん、おさへてしもてはならん、夜々の刻限にさとしよふとおもへども分らんものではわからん、なれどもならん中にもそふ〳〵中にも中とゆふ、ぢうよふとゆふ、めん〳〵事情あつては身上さはりから尋る、身上さわり刻限さとす中とゆふりがむつかしい、むつかしいよふにするのやよふ聞分け、順序の理さとしてある、一つのくもりがある、くもり〳〵の中に大切とゆふりがある、この順序をよく聞分け、なんでもかでも刻限をもつてしらす、まああしたの事じや、一時に尋ねてくれるであろふ、人々によつてをくり〳〵のものもある、尋ねる刻限おくり〳〵て順序よふいならん、くもり〳〵となるちいさいとおもたらちがう、ちいさいりからこれあきらかの道であろふ、身上はあんじる事いらんで、天よりあたへたるさしづをよぶ順序の道をさとつてくれにやならん。

△押て城島分教會の方で御座り升かと御願

さあ〳〵尋ねにやわからん、事情で尋る心に十分りおさめ、兄弟なら兄弟のりをもつて萬事さとしあい、ほんに一寸の心のまちがい、一日の日をもつて大へん神の道はどうりをもつて、いがみをさとせばをさまらんじやない、身上なやみ身の内がなやめばみなの中一つ心になつておさめよ、順序の理心一つ一日の日に心をおさめてくれ、さあどこじやかしこじやない、このをさめよいりをもつて早くつとめてくれ。

△明治三十二年五月三十日朝御願五月二十日本局大祭に付教長様御出京に相成、大祭仕舞し後、管長稲葉正善公及野田幹事より教長様に向ひ、天理教會の從來本局のため盡力の廉により、目下の時機として別派獨立の恩命ありしに付、歸部の上教長様御心得として事情くわしく申上御願（御上京隨行員清水永尾の兩人）

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ〳〵いかなる事情も尋ねにやなろふまい、尋ねるからは理をさとそふ、しつかりかきとつてくれ、一つ〳〵理をさとするしつかりかきとれ、よふきゝとれ、もふこれ他には夫々十分ゆふまでのりやろう、まあ一つ教會とゆふて順序世上世界のりにゆるしおいたる處、どふでもこふでも世上のりにむすんであるからとゆふて、世上のりばかりもちいてはならんで、尋ねる事情はおそいはやいはゆはん、世上とゆふせかいのりから順序はこんで事情獨立とゆふ、事情は世界のりにむすんでもなを〳〵元々もんかたなき處よりはじめかけた一つのりをもつて、萬事くゝりかたおさめかた、むすびかた

とゆふ、此理一つが道のりであるほどに、はじめかけとゆふ、こすにこせんから世上のりとしてゆるしたる處、まあ一二年二三年とゆふはどんなこんなんともわからなんだ、今一時尋ねる事情しゆんとゆへばしゆん、世界のどふりからゆへばしゆんともゆふ、尋る事情はきゝわけ、日々とゆふさとしかたは元々はじめかけたりより外にりはないで、よりくるもの兄弟なら兄弟の理地塲はじめたりとゆふはよふいやないで、世上せかいの理と一つになりてはならん、おさめかたは日々さとするりにあるほどに、尋ねた事情なるならんはさておき、一ケ年二ケ年ではあざやかな事情はみられよふまい、さあ〳〵はじめかけぼつ〳〵始めかけ。

△明治三十二年五月三十一日前増野氏の御指圖より段々先生方協議の上、城島分教會の事であらうとの事に付、今分教會にては未だ會長定まらずに付後任とすべき人は只今にて三名御座い升、山田伊八郎氏は古き人なり、又加見兵四郎氏は講社多分有り餘程道の爲に盡力のせる人なり、又峯畑爲吉氏は副會長の名も有り、教會に餘程功ある人なり目下取定めに心配致して居りますから此段御願申上ます

さあ〳〵尋る事情〳〵、いかな事も萬事尋ねにや分ろふまい、身のうちさわりつけたら尋る、尋ねたらさしづのりにおよぶ、さしづから協議をはじめて事情よふき、わけてくれにやなら

ん、道理りでさとそふ、かづ〳〵はゆはん道理をはづせばきりのなきもの、道理にはづれる理はない、此道はどふゆふ處からはじまつたか、ねうちあるだけはたれでもかうなれど、年限の理心の理なくば理はなきもの、今はどんな處あつても元とゆふはちいさいなれど、なか〳〵のりやで、元わからんよふではならん、地場はじめた一つの理聞分け、ゆびをおつてかぞへてみよ、何年あとかぞへてみよ、二年や三年でなつたものやあろふまい、たれがどふかれがどふめん〳〵かつてとゆふりあつてはならん、なんぼかしこ生れても、をしへにやしらせんきかにやわからん、どんなものでもきいて一つとふりて一つ、年限重ねて一つのりとゆふ、なんべん尋ねてもわからん、わからせんもふ一ぺんきよぎをしなをせ、むこふにせへとはゆはん、地場か

らこふとゆへばそむくものはあろふまい、をさまるものやろふ、みな〳〵協議をしてくれにやわかろふまい。

△押して山田伊八郎氏を會長と定めて宜し御座りますか

さあ〳〵道とゆふものは一時についたものやない、一里とゞき二里とゞき、五里十里とゞき〳〵て道とゆふ、元はちいさいものや、萬事なにかの處も此心得をもつてとりあつかつくれ。

△押して前の御指圖の中に『くもり〳〵』と仰せ下されては如何の處で有ますか御願ひ

さあ〳〵尋ねる處〳〵、皆々の中であろふ〳〵、きけばつらい、それはなさけない、むさくろしいよふきゝわけ、一時もつてさしづ萬事のりにそむかんよふ、りの中にすむかぎりはそだ

てにやならん、そだてるりがあつてそだつのやろふ、みなの中よくがさかんであろふ、くもりあつてはさかんとはゆゑん、つみあつては道とはゆをふまい、何かさとしやい、何かたすけやい此の順序もつて治めてくれにやならん。

さあ〳〵くどき咄しするよふきいてくれ、此道とゆふはよふいでできたものやない、またく〳〵はんぜんの道とはゆをまい、よふきゝわけてくれ、一寸始めかけたときは何をゆふぞいなあとゆふよふなものや、だん〳〵つきぬけ今ではどれだけのものになつた、中々よふいでなつたのやない、もふほんの一寸のりから一人はじめ、二人始め、それ〳〵順序からついた道、元はなにもなかつたものや、一つ〳〵りをきゝわけて、よふ〳〵ほそい道とゆふ、ほんにそれだけの日もあつたか、年限のり他にき

いてもなるほどゝゆふ、どれだけかたきのものでも道のりにはかなはんなあといふ、つみがあるくもりがあつては世上からそらはじめよつたなあとゆふやろ、ふじをまつはあくにんや、あくにんはかたきとせにやならん、此理からきゝわけてくれ。

△押て只今御聞かせ下さるは現場に御座り升か又心得に御聞せ下さるや

さあ〳〵尋る處〳〵是から先とゆふりもさとしてあれば、今迄のくどきもある、萬事の處中よく順序是一つが第一よふきゝわけ、そも〳〵ではなろふまい、おれが〳〵とゆふてもなろふまい、是からよく一つ〳〵りをきゝわけてくれ、そだてばそだつ、やろとゆゑばとらんとゆふ、やらんとゆへばくれとゆふ、みな〳〵それ〳〵此のりからしらべ、何がどふとはゆはん心だ

けの順序を一寸みなのものにしらしおく。

△明治三十二年六月六日獨立願に付教長様御心得のため御願なされ候處、右の御さしづに依り、本部員一同へ御咄し下され、其上分教會長を召集し、分教會長へも同様傳へ合、而して本部員、分教會長一同打揃ひ出席の上御願ひ

さあ〳〵だん〳〵尋る事情〳〵、ぜん〳〵事情に一寸かゝり、一つのりをさとしたる、だん〳〵のみちすぢあら〳〵のみちは是迄とゆふ、一時みな〳〵それ〳〵の心、一日の日をもつて尋出る處、精神のりで實々のりまつていたやろ、又またにやなろふまい、かゝりた處が一寸にはいかん、一寸にはいかんがどふでもこふでもはやくからいらつてはならん、あちらにも心があ

る、こちらにも心がある、心がよるから萬事なりたつとみにやなろふまい、なりたつたら大へんな事もあるやろう、大へんな事あろふといへばどふなると一つかんじの心、そうやろふなりたちとゆふは中々むつかしいもの、なりたつたら十分、それから又むつかしい、なんぼおふきなものでも、すくんでいてはわからん、世上へ出るでわかるとゆふよふなものや、やりかけたらどこまでもやらにやならんが一つのりであろふ、もととゆふはじまりとゆふはしるしもなく、あれはなんじや、きのまちがいかいなあとゆふよふな中から、なりたつた道、よふいならんりから世上へもほつとにほひかゝり、あれも處のしるしや、これも處のしるしやとゆふはよふ〳〵の道、皆そろふて一つの心、教祖存命中の心をもつて尋出た一日の日の心のりに萬事ゆ

るしおこふ〳〵。

△一同手うちしあとへつゞいて

さあもふ一こゑ、一日の日をもつて席をして尋ねたりはあんしんしてなりやとおもうりは安心なれど、まあ一寸にはいかん、そこでこんな事ならとおもう日もあろふその日あつても何でもかでも順序一つの心をもつてとふりてくれにやならん、とふりぞこのふてはならんで、元々西も東も北南もなんにもわからん中からでけた中々の道やで、いばら道ともがけ道ともほそみちともゆふよふいならんこの道であるほどに、今の道は今一時になつた道やあろふまい、此心しいかりおさめて事情かゝるが道の花ともゆふ、これだけみな〳〵の心にりがわかれば一つは聞分けるやろふ、またあんらくなりもきかさにやならん、これだ

けさとしおこふ。

△明治三十二年六月十一日本部員西浦彌平様身上

御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、どふもよぎなく事情、尋るやろふぜん〳〵よりもさあ一日も早くとゆふ、一つ〳〵のりをさとしたる、よふきいてりをおさめてくれにやならんで、どふゆふものやろ、なんでやろふと日々おもふやろなれど、順序きゝわけてくれ、身上とゆふ何ケ年前よりどふでもこふでもとおもふて、今日の日一時の處内々にもどふなろふとおもふみともおもふやろふ、古い事情になす事情、いんねんこれ一時わかろふまい、だん〳〵心はこびつくす所は十分受取てある、よふ〳〵十分のりに治まりて、さあこれからとゆふ、どふもたよりなさとおも

ふよふきゝわけ、一代とおもへばたよりない、りは末代やで、よふ心に治めてくれ、一つさとすにもよほど事情、内々もしつかり心定めてくれ、ゆだんどころやない、いんねん事情なす事情いんねん事情、これきゝわけてくれ、一時ではないなれど、よほどたいそふともゆふ、さあ〳〵ならん時のたがひとゆふ、はやく〳〵、さあ〳〵まあ〳〵どふでもこふでも世界はわからんから十分の理をはこんでおさめるよふ。

△明治三十二年六月十四日清水、松村二名明十五日

上京御許願

さあ〳〵尋る事情〳〵、はぜん〳〵事情にさとしたるみな〳〵それ〳〵のり心のり、一つこふとゆふなんでもどふでもこふでも一つの心のりとしてゆるそ〳〵。

△東京にて家屋一ケ所借入の願

さあ〳〵尋る事情〳〵、道とゆふものはすぐといけばすぐ一つの心、あちらの心こちらの心をよせて道に順序どふしたらよかろ、今迄のりこふとゆふ精神のりにゆるしたのや、出しかけてもこれではなあとゆふこともあろ、この道とゆふ元々むつかして〳〵ならん道からなりたつたのや、その中を道に一つの心をよせて順序はこびきた、しんじつはたらきは目に見えやせんで順序から分る道もある、心にまかせをく、どんな日もあるで、これでなあとゆふ日もあるで、どんな事もゆふておかにやわからんで。

△明治三十二年六月十九日御本席様三四日前頭痛にてたんつかへ御休みに付御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、いつ〳〵いかなる事情も尋ねにやなろふまい〳〵、さとしにもある刻限さとしたいなれど、どふもさとす事でけんとはぜん〳〵さとしたる、みんなよふきゝわけにやわかりがたない、一寸どふとゆふなんでもとおもふなれど、身上さわりといへば一時どふする事もでけよふまい、みな〳〵みな〳〵まんぞくのりをあたへば、みんなそれからそれへだん〳〵りをはこんでたのしむやろふ、一日二日又三日はこぶ事でけねばどふなるやろふとおもふ、是から順序にあちらでもどふや、こちらでもどふや、たがい〳〵心のくもりどうもおさまらなんだ、なんでもかでも元とゆふ一つのりからやなけりやをさまろふまい、あれはおもいがけないよふをさまつたなあとゆふも、元とゆふりをたてるからをさまるのや、かけへだてのりは

あろまいなれど、身びき身がつてあつてはどふもならん、元の古い道一だん〳〵くづすよふなもの、年限たてば人間心のりになつたぶにやなろふまい、一人たよりにして入込で、日々はこばす所、心のとりよではつとおもふはすよふな事あつてはなろまい、この道とゆふだん〳〵の道であるほどに、今日の一時せいりよくよいといへど、元はあちへにげこちらへにげ、ほそいほそいいばら道からなりたつたものである、處々のおさめかたよふきゝわけちいさいものがちいさいとゆゑん、おふきいものはおほきいとゆゑよふまい、古き道よりみわけてくれ十年は十年、二十年は二十年、三十年は三十年、だんだんの道はきいてもいるやろふ、中よくが第一のり、日々中よくとふるなら、一だん〳〵りをくみたてる、ふみそこないあつてはならんで、事

情みな〳〵心あつまつてこふとゆふ、あざやかの理にゆるした
る、そのさしづのりにも元とゆふかゝりとゆふりは、幾重〳〵
のりにさとしたる、こちらむいてもわからん〳〵の中からでけ
た道である、どれだけつよいゑらいとゆふても、元とゆふりは
なけにやならん、とりかやしのならん事あつてはならん、めん
〳〵によふしやんしてくれ、さしづのりは席にこふゆふりであ
つたときかしてくれ、是が第一この順序の理より治めたら萬事
をさまる、さびが出てからはどふもならん、是迄おもきもの、
身上にもしらしてある〳〵、今日のさとししつかりかきとつ
て、しいかり心におぼへてくれるよふ。

△明治三十二年六月二十五日清水與之助氏本局へ掛
合事情願

さあ〳〵尋る事情〳〵、尋る事情はみなぜん〳〵事情に尋ねた
ぜん〳〵事情にさとしおいたる、一時にいかん一寸いかん、り
のさとしどふもさきとゆふ、人間の心これだけこふしたならと
とりはこぶりじやない、たのんでする道じやない、どこへどふ
するのやない、みな一つのりよぎなく道をとふしてあるのや
〳〵、さき一本だちしんの心が一本だち、みな一つの心をもつ
てくれにやならん、一時の處いやとはいゑよまい、それで一寸
にはいこまいなるならん年限とゆふ道とゆふ理をもつてくれ。
さあ〳〵一時はこびかけたる、ならんといへばならん、なると
いへばなる、めをかけてゆけばきりがない、かならず〳〵せく
事はいかんで。
さあ〳〵かゝりかけたらならんといへばならん、なるといへば

なる、なんぼでも心にはまらにやさとしむつかしい、ならんりなるといへない、なんぼでもといへばどうもならん、こふしたら世界この道とゆふなりたつた理をきいてなら、たゞ一本だちは大そうのり、心とゆふ誠とゆふわかり〳〵、一つの心たつところない、これ一つ心にこれだけもつていやにやならん〳〵、ならんものむりにならんはこぶ處はこんで、ならんにやじつとするがよい。

さあ〳〵かゝりかけたらしばらくみなはたらきの道とゆふ心をもつているがよい。

△明治三十二年六月二十六日増野正兵衛氏身上並に子息道興身上に付御願

さあ〳〵尋る事情〳〵身上に一つ日々心ゑんとゆふ、又一時一

つ小人事情いかな事とおもふ、さあ〳〵尋るやろふ尋ねにや分りやせん、どちらのさしづこちらのさしづ、へだてはないで、よふきゝわけ、あちらがさはるこちらがさはる身上から尋ねたらそれ〴〵さしづにおよぶ、さしづの理はたがはんがさしづ、尋るからはさしづどふりはこばにやなんにもならん、はこんでこそさしづのこふのふとゆふ、よふきゝとれ、どんな事もこんな事もこふとおもてもなるものやない、おらこふおもふ、たがひ〳〵中にこふゆふりもあろふと、順序から順序とゆふで、にんの順序からひとあしのりばかり、人のゑんりよいらんで、たがひ〳〵りをあつめてこふとゆふ道一つのりに治めにやならん、幾たび尋ねてもなんぼさしづうけても、さしづどふりのりにはこばねばなんにもならん、たゞ人間のはからひでは順序と

はゆゑん、道は道にたてず、理を理にたてず、はこびせんのなら尋ねにをよばん、さあどんな處へかゝるやらしれんうつかりはしてはいられんで。

△しばらくして

さあ〳〵こちらの順序おさへるだけはおさへくれるなれど、だん〳〵順序おくれるばかり、これだけ尋ねたら何かの事もわかるやろふ。

△押しておさへるとゆふり如何御願

さあ〳〵尋ねる處〳〵、なんでもないよふに思ふている、一つ〳〵りにあつめて何かの順序けしてしまふ、ちいさいものがちいそふない大きいものが大きいない、何かあらためてよふきゝわけにやならんで。

△押して

さあ〳〵尋る〳〵、尋るからはさしづとゆふ、なんべんさしづしてもどふもならん、にんの心におそれるよふな事ではさしづはすつきりいらんもの、上に立て下をおさめる下の理をおもはにやならん、さあとりちがい〳〵この理はどこへもかゝらせんで、だん〳〵山阪をこゑこの道順序とゆふ、あんなものぐらいとゆへばちいさいもの、よふきゝわけ、元とゆふりから治めばどんな事も治まる、人のゑんりよふはすふきりいらん。

△押して

さあ〳〵尋ねる處〳〵、一時尋る事情〳〵、いかな事とおもふ、どれだけのりたんのふしてよろこんでもいるなれど、順序さとしたるちいさいものはちいさいとはゆはん、はじまりとゆ

ふは大きい處よりはじまりたのやない、よふきゝわけ、大きいといへば大きい處へ心よつてしもてはならんあらつきものかいなあ、きのまちがひとゆふた日もあつたやろふ、治め方〳〵とゆふ、めん〳〵心にならんとおもふてはこぶから、道のりは分るやろ、分らにやならん。

△一寸して

さあ〳〵よい〳〵では分らん、よふきゝわけ、身上にかるいさとりの間に尋ねて、さしづ一つのりをうけたらどふでもこふでもさしづどふりはこばにやならん、あちらにもさはりこちらにもさはり、よふみな〳〵心にとりきまりてくれにやならん、かたくさとしおく、うつかりしていられんで、これでよいとおもていたらよいがよいにたたん。

△明治三十二年六月二十七日昨日増野氏身上御指圖より一同協議の上御願

第一梶本楢二郎氏政枝縁談に付前に一時開くと仰せ下され此儀は元々通りよせる事に致し升方が宜敷か、又さらに運びまして宜敷か御願

さあ〳〵何か順序も是迄どふゆふ事もこふゆふ事も、身のさはりから尋る、ちよい〳〵とのさしづ、もふどふもこふもなんでもかでもこくげんさとしたいなれど、さとすことでけがたないから、あちらにも一寸こちらにも一寸身上にしるしつけたる、心得んから尋る、尋ねたらちよい〳〵とのさしづしてある、かゝる處によつてまあ〳〵とゆふてのばしてある、身上から尋る尋るたびにさとしたるなれど、はんぜんさとす事でけがたな

い、十のものならあと七つどふりにかなはん事もある、是迄ら取てみればしんぼうも、はつさんもせにやならんなれど、にんにんの心はかつてどうりをすてゝはならん、人におそれるからどふりをはづさんならん、人におそれるよふでは一時の處はとふれるが、とふるにとふれんよふになる、日々順序はこぶ中にこもりある、一つ〳〵聞分け、十人ある中上三人、あと七人のものこれどふなるか、どれほどゑらいとゆふてもどちらへはたらきあるか、どちらへ神の守護あるか、よふきゝわけ、人間のりをたてるからだん〳〵道のりがうすくなる、人間のちゑでとふれるか、道のりがなければ守護はないで、これで道がとふれるか。

押して前御願の事情

さあ〳〵尋る處〳〵、兄弟三人〳〵の道理事情たづねる、もふ一つの處ならん〳〵のりをあはせ、心とゆふ一時おもたりがかはり、かんねんの心はとめているからにんの心に尋ねてくれ、同じ兄弟ふせこんだりがある、にんの心にまかせにやならん、それでまんぞくよふきゝわけ、わづかの年限の中に心にかゝりてなにがたのしみあるか、さあ〳〵かれこれと一つでかけたら、あちらもこちらもでる、ふるい口うしのふてしもている、さいそくあつたらほつておけんとゆふよふではならん、三人兄弟とゆふもふ二人はそこい〳〵あと一人はたからみればあらどふするのか、どふかせにやなろまいとゆふものもある、ぜんぜんなぜあゝゆふ事になつたとおもうやろ、よふきゝわけ、にん

とにんと心あはねばどふもならんとはぜんぜんよりもゑんだん事情にみなさとしたる、わからんやあろふまい、長いよふでみぢかい年限の事、これきゝわけたら何かの事も分るやろ。

第二只今普請中の建物はぜん〳〵刻限で名前をつけると仰せられ候、右はどなたの名前に致しましたものか

さあ〳〵尋ねてくれる處〳〵、尋ねにやならん、刻限でさとしたいなれど、日々おくれにみなおくれたる、あちらこちら身のさはりから尋る、たづねたら一つ〳〵りをさとしたる、あはせてくれ、にんはかんねんしているなれど、かんねんの中のりをきゝわけ、ふじゆふくらしさそふとゆふてつれてもどりたものやない、あんらくぐらしさそふとゆふてつれてもどりたものや、何ケ年以前からはんぜんならん中からつれてもどりたものや、つれてもどりてからのなんぎくろふ、みわけたらわかるやろ、此どふりきゝわけてやれ、きゝわけてやらにやならん。

押してまさゑさんの名前に致しますものか

さあ〳〵どふしてくれ、こふしてくれ、これは席からはゆはさん、どふりにあるどふりからはこばにやなろまい、なんでもないとおもたらなんでもない、道のりからすればかるいものやあろふまい。

第三なら糸様の事情御願

さあ〳〵みなこれまで〳〵、時々にもどりてそれ〴〵まあ〳〵とふぶんとゆふて、順序はこびかけたる、ぜんぜん心にこれはとおもた一日の日がある、このりがどふもとけんから、もどろ

とおもへどもどる事でけん、心にはあとおもふからもどれん、よふきゝわけ、存命中から一つのりをさづけたる處、めん〳〵身に何一つそゝうもなく、今日までとゆふ、六年以前これはとおもた一つのりから、あきらか事情におさめて早くはこんでくれ、道のため一つのりをさづけたるものが、じやまになるよふにおもていてはどんな事でけるやらしれんで、どふにもこふにもならんとゆふよふな事情になつてからはどんならんで、はやく一つのみちをはこべ〳〵。

第四梶本宗太郎氏十三才になれば屋敷へ引寄せると仰せ置き下され候、本年は餘程年限も立て御座り升が如何運びましてよろしきや

さあ〳〵尋る事教〳〵、どれだけどふしたいこれだけこふしたいとおもても、心とゆふりがおさまらにやどふもならん、早くからどふこうおもてもならんなれど、ほつてはならんで、それ〳〵心の順序にまかせおこふ。

△四點の御願相濟一同手打しあとへつゞいて

さあ〳〵もふ一筆〳〵、一筆とゆふはどふゆふ事であろふ、よふ一點をうつてしつかり筆をとれ、これまで〳〵みなそれ〳〵の中、たいていあら〳〵は聞分ている、ばんじの中とゆふ、第一とゆふ中に一つのどふりからさとす、かへし〳〵くどふ〳〵さとすのは、かはいからさとすのや、うつかりおもていたらならんで、でけてからはならん、詰合事情ぜん〳〵さとしたる、よふ〳〵のどふりをむすび、二三回はそこひ〳〵なれど、こにやこんまゝ、出にやでんまゝではなろふまい、きてもこひでも

しらしあいはせにやならん、しらしても用がありや出らりやせん、人がありやいかりやせん、おれにはさたがなかつたとゆふよふではどふもはんぜんならん、くもり〳〵のりが出る、此理かさなりたらどんならんで、わざとゆふはみな心から出るはじめはちいさいものや、なれどちいさいりが大きいなればどふもならん、なんぼ大きいきづてもふせいだらふせがれる、なれどちいさいきづがほつておいては大きなきづになる、この心をもつて日々とゆふ、これ一つ聞分けてくれ。

△押して

さあ〳〵よふきゝわけにやならん、十のものなら九つ半までいても、あと半の事でみなきへてしまふ、めん〳〵にくらべてみよ、出てもでいでもゆふだけ、ゆはにやならんゆうて、今日はこふやとゆへばそれでまんぞく、いけんとゆへばなんじやいなあと、心をにごす、三人や四人よつてする事一時間や二時間はつゝまれるなれど、三四時間たてばすぐ八方へわかるやろ。

△又一同手打し後へ

ばんじそこへ〳〵はまりたか、一時間や二時間ぐらいはなんともないで、心にはまらにやはまるだけ尋ねてくれ、存命よりうつしこんだるりがある、一時間はあぶないよふなりもさとすなれど、日がらがたてばみなりにあつまつてくる、しんじつのさとしとゆふよふきゝわけにやならんで。

△明治三十二年七月七日本局へ交渉の爲め上京中の清水、松村兩氏より段々御運ひの末申越され候に付本部員相談の上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、いかな事も尋るやろ、一時尋る處まあ〳〵道理からもつてゆへばおぎない同様のもの〳〵なれど、こゝもこふだんじ一つのり尋るからよぎなく事情にゆるしたる、又ぜん〳〵さいしよとゆふりにもさとしたる、何をしたんぞいなあとゆふ事もあるなれどみなめん〳〵何でもとゆふ心もつてすればならんやあろまい、尋るまで今日一時尋る事情、それ〴〵だんじとゆふ、是迄の處ならん中一つのあぢともゆふ、是からもつてすればはらたてさすこともいらん、まあそこい〳〵の事ならおふぼふの心をもつて取掛つてもよかろふ、やつてもよかろ、おふぼふとゆふはどふゆふ事とおもうやろ、此道とゆふ、元々願てどふするのやない、たのんでするのやないと、古いさとしにもしてある、ならん處よぎなくほんのこしかけとゆふりにゆるしたる、これからしあんすればおふぼふとゆふりはわかるやろふ、そこい〳〵よせてやらにやならん、是だけさとしたら心おきのふやるがよい〳〵。

△永尾氏此運びに付上京の御願

さあ〳〵尋る處〳〵、何心なくして時ばかりまつている、ほんのたよりだけでは心ならん、今日の日順序をもつてさとしたる處、一人もつてまんぞくさすがよい。

△明治三十二年七月二十三日獨立願書に添付する教會の起源、及沿革御教祖の履歴、教義の大要に付御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、尋る事情はまあ〳〵一寸、みなそれ〴〵これだけとゆふ處かきだして、それ〳〵つたへたる事

情、一寸あらためたよふなもの、だす處何も分らせん、ぜん〳〵あら〳〵、今日の日をもつてばんじはこんでこふとゆふ處、これはぜん〳〵ゆるしたるなれど、よふ聞いておかにやならん、一寸かきしるした處、どこにもあるこゝにもあるとゆふよふなりになりてある、此道古きものは聞いているやろ、願ふてどふするのやない、なれど年限から天然の道のりによつてなり立た道とさとしたる、ほんの一時世上のどふりに一つ〳〵心安めにゆるしてある、又一本立とゆふはよふ〳〵の咄しにもしてあるなれど、道すがらの中にもふどふしよふかとおもた日もあるなれど、心やすめさあこれからが一つのせいしんなけにやならん、だん〳〵をしへのりとゆふはよふきゝわけ、萬事あらためて一つりをはじめておさめるとゆふは、みな一年一つの心なけりやおさまつてもおさまらん、元とゆふは人間心でなつたのでないとゆふ事はしつているやろ、今日一日の日をもつて尋出するとゆふは、はじまりともゆふ、なにか道理をはづしてはならんで、元とゆふは心にあるとゆふてもあれば、あるだけのりをうつさねばないとゆふてもどふであろ。あらためてこふとゆふ處はとめるやない、いさんで出してくれ、出す處にくもりあつてはならん、日々八つ〳〵のほこりをさとしている、八つさとすだけではふすまにかいた繪のよふなもの、なんべんみてもうつくしかいたるなあとゆふだけではならん、めん〳〵聞分けて心にりを治めにやならん、此教とゆふはどふでもこふでも心にりがおさまらにやならん、あちらはなしこちらはなし白いものやとゆふてうつても、くろかつたらどふするぞ、今日かぎ

りのさしづよふき、わけ、またがりはない、あちらながめこちらながめて、かつてのよいりを出し、むりのりでもとふすとゆふは人間ぼんぶのりである、今日の日のさしづはうつかり聞いていられれん、此理さへまもりてはこぶなら神がどんな事も引受る、どんななんものがれさすとゆふばんじほんのかどめだけ〳〵、それでよい〳〵、さあ〳〵だすがよい〳〵。

△教師總代は本部員一同及び分教會長連印、信徒總代は國々の熱心の有志者を調印する事御願

さあ〳〵尋る處〳〵、一つ〳〵のりをあらため、ばんじ順序さとす、どふせにやならんこふせにやならんとゆふてもそらなろふまい、ほんのかなな事で一寸さとす、ほんのおぎなうよふなものや、世上には何教會何派とゆふ、それも同じよふなもの、

それと同じ心もつていてはならん、よふきゝわけ、しんの道の理とゆふは、めん〳〵心におさめてくれにやならん、しぜん〳〵うすくなるよふではせかいなみどふよふのりになつてしまう、年限つくしたりはこんだりがあつて今日の日、これきゝわけてめん〳〵その心をもつてはこばにやならん、此書面とゆふは世上おうぼうのり、明らか道は中々よふいでつけたのやない、けふのり聞分け、此書面だけではあとさきのりは分らんなれど、書面は世上のりであるからいさんでやれ〳〵、又一つ聞分け、どれだけのものになつたて心うしのふてしまへば、それまで何のたのしみもない、古き〳〵のりからなりたつたもの此理聞分てくれ〳〵。

△二十六日敎長様御出立御願

さあ〳〵尋る事情、事情はそれぜん〳〵のさしづにくはしくはなしつたへてある、なれどつたへよふがある、此願書おふぼふの理にゆるしたる、今日の日にどふせにやならんこふせにやならんとゆへばこんなんであろ、心よふいくがよい、そのかはりぜん〳〵刻限の理にもしらしたる、これはこばにやならん、どのくらいけつこふにおもても一夜につぶれたる事もある、これいつ〳〵までももちいにやならん、一人ではいこふまい、それ〳〵出るにんもよふしやん、一日の日に尋ねたさしづ、これよりたよりがないとおもへば十分のぢゆよふみせてやる。

△敎長様御上京隨行清水、平野、松村、篠森、永尾

さあ〳〵それはもふ出こす處、心おきのふあんしんにおもてでるがよい〳〵。

△明治三十二年七月二十四日櫟本梶本宗太郎氏及家族共御本部の方へ引越下さる事に付、當分の處小二階の方へ住居して貰ふ事の御願

さあ〳〵何か萬事尋ねにや分ろまい、ぜん〳〵さとしたる、だん〳〵古い事情にだん〳〵二三點事情もつて尋る事情、それはいかな事情、早くどふせにやいかんとさとしたる、よふきゝわけ、古き〳〵道あつてさとしたる、いかな事情よふ聞分け、かぞくもろともひきこすがよい、そらゆるすなれどあとゝゆふ順序きまつて尋ね、この順序あるか、ぞんめいにはじめかけたる、をもて大工裏かじや〳〵、しよふらい一つりなくばなら ん、なれどあと〳〵つなぐしそんつなぐきまりありて、いつ

〳〵何時なりとあとあとつたはるり、この理かるいりやない、順序だいとしてはじめかけ、あと〳〵しよふらいつたへるり、はこんで古き〳〵ものつれてもどる、あと〳〵つたはるり、かぞくあとつなぐ事情なくばならん、そふしてあと〳〵こふなつてどふしてとゆふ處たづねてさしづどふりすればまちがいはない、教祖存命つたへたるりけす事でけん、かぞくこせばあとどふなるか、そこで何時なりとと一寸ゆいにくい、あと〳〵つたうりきゝわけてはこんでいそいではならん、だいじな事やで、やりぞこのふてはならんで。

△押して子孫と仰せ下さる處、つゞいた子供衆でも一人のこしおいてつがす事で有り升か、又は徳二郎でもつがす事で有り升か

さあ〳〵尋る事情〳〵、いかなるも尋ねにやならん、子孫うち〳〵にうまれたものある〳〵、これは古い〳〵二十年やない、三十年やない、どふもならん、なんぼふでもききいれなくたちこしたる、だん〳〵おくれてしもて何もどふもならん、どふなりたとゆふよふな事ではならん、神一つのりあればこそ今につゞいてあるとみなよろこぶ、あとゆづりてうまれたものある、今一つやといれてはならん、ちわけたものもある、たちこせばすつきりものやるがよい、つゝんだものやるとゆふよふにみれんかけず、きれいにしてあと〳〵どふしたとゆふすればひらいてきたとゆふりも同じ事、教祖存命もおなじりになるときかしおこう。

△明治三十二年七月二十四日上田なら糸様の運び方の事に付御願

さあ〳〵尋ね〳〵、だん〳〵尋る一度やない二度やない、時々もつていそぐ〳〵とゆふ、古い事情とゆふていそぐ、いつまでみていた處が同じ事、しきりて順序はこぶ、はこぶどふでもこふでも存命はなしかけたる時によりておくれる、そのばはこばにやならんはのこしたる理人間心とおもたらちがう、元はきちがいかいなあとゆふよふな事からおい〳〵およぼしたる、なんぼふおよぼしたる處その時にんとゆふ、なんぼどふしてやろこふしてやろとおもても、どふもかをもみせん、そこいもこんどふもならん道とゆふ、そのり治めていればどふでもこふでもなつてくればりよふきゝわけ、中に一つきゝわけ〳〵、治めかたに一つ事情はこび方に一つ事情、おめをそれしてはならん、人間のはこびとみてはならん、神の心人間の心とはちがい、なんでもかでもでゝこにやならん、よふきゝわけ、はあとおもたりからいづんだ、いづんだ處なんでもかでもはつさんさゝにやならん〳〵、ことばの理からなつたればなんでもかでもしよちさゝにやならん、きのまちがいとおもふよふな處からはじまつたる、たれも天理王命としつたものない、元はつきものかしらんとゆふ處からでけてきた、人はしらんからおもふ、何か順序ひまがいつてはならん、ことば一つではぢまつたる、よき事とわるい事も日さへたつたらどふや、それではならん道によつて心よりてくればよりてくる道なくばならん、きなとゆふてくる、又こいとゆふてもでゝこん、きなとゆふてもくる道は心とゆふ

理ありてよる、これきゝわけ、ぞんめいより一名ぐらしとゆふたり、なか〳〵のりであるで、又にんそくやしろ、又いりこむとゆふ、このりきいている、にんそくだい〳〵つゞいてまた〳〵とゆふ、きれてはならん、今一時の處つとめてゐるなれど、よふきゝわけ、いつまでとおもたらちがう、又あと〳〵やくめへなんでもかでもさしづ〳〵、やくなくばならん、たゞ人間はひとはなさいてもりがない、おれしよふとゆふてもことばでるものやない、このりよくきゝわけにやならん。

△押して上田嘉助氏存命の時にこの家こぼつてしもて家内中引越してやらしてもろたら、なら糸おさまるやと御咄しもあつたとの事、又只今の家内中もそのせいしんありますなれど、屋敷にいんねん

あると教祖様よりきかしてもろていますから如何であろかと御尋有り升に付心得のため御願

さあ〳〵尋る處〳〵、さあ〳〵もふこれ萬事の處とゆふ、一名ぐらしとゆふたる年限をくりてみよ、人足やしろとゆふてもらいうけたでとゆふたは、もう何年たつか、よふきゝわけておさめてやらにやならん、はなす〳〵だん〳〵十分ひきやい、かけやう〳〵つたへ〳〵どふでもこふでもおさめるほどに〳〵。

△又押しておとの處どふゆふ都合にはこぱしてもらいますがよろし御座りまするか心得のため御願申上ます

さあ〳〵尋る處〳〵、まあどふもだんじ一寸つこふまい、二度三度でおさめつこふまい〳〵、なれどどふでもこふでもそれ

〳〵かないの心、はた〳〵わかき處もおさまれば何時にても〳〵。

△又押して前の事情萬事くわしく申上御願

さあ〳〵だん〳〵尋ねかやす處、たゞ一人とおもたらちがい、おや〳〵順序一日とゆふた日ある、もらいうけた一人ぐらしとゆふた日ある、そのりおよぼさにやならん、あと〳〵りなくばならん、いつまでもとおもたらならん、さしつかへるで〳〵、おいおれしよふとゆふた處がいかん、今かはりしよふとゆふていかん、一つのことばでるか何でもか年限からなりたあたもの、なんでもみんなの心にときほどきてくれにやならん。

△明治三十二年七月二十五日南海分教會長山田作治郎四十才身上御願

さあ〳〵だん〳〵事情をもつて尋る、一時の事情一つのりはどふも一時ならん事情、おもふ事情であろ、いかな事情とおもふ、ぜん〳〵みな理にさとしたる、どふゆふ事さとしおいたるなら、なんでも早く〳〵きをやすめさすがよいとゆふたる、ぜん〳〵とふくからなか〳〵ならん處も、よふ〳〵是でならとゆふりになつてから身上とゆふ、一寸かるふとればあれだけはこび、あれだけつくしとふりにくい處とふりぬけ、やれ〳〵とゆふ日におよんで身上なんでやろとおもふはほんのくち、さあ〳〵心やすめ〳〵、十分心やすましてくれ、こちらへとゆふ地場へとゆふ、一つのさとしもあつたやろ、それからみな心を定めてくれた日もあろふ、さあ一時身の處どふなろとおもふ中たゞ一つたんのふのりにとゞまりてある、早くさとしてくれ、あ

と〳〵何をしたんぞいなあとゆふよふな事ではならん、もんかたなき處からだん〳〵所々一つの事情はじめたり、そふゆふたら又一つおもふやろ、それだけのりがあるのに、なぜやろとおもふなれど、中ばであつたらどふするぞ、さあ〳〵たつた一つのたんのふ地塲一つのりにむすんでやれ〳〵。

△押して心やすませと仰せ下さる處本人の家内で有り升か

さあ〳〵たんのふをさとしてくれ〳〵、もふたんのふとゆふりがしんの心やすめであるほどに、地塲一つのてのつないだる中に、一日の日にむすびこんでやつてくれ。

△押て結込んでやる事を運ぶ所は先方にたのんで教長様へ運ぶ事で有り升か

さあ〳〵もふ一日の日も早くたんのふさしてくれ、地塲一つのりにむすんだでと、早く〳〵つたへてくれ〳〵。

△明治三十二年八月五日天理派獨立願に付信徒總代の處本部一般部内有力者だけでは將來治め方に關する故、分教會長と共に調印して貰ひ度と取極の處、只本局にては成る丈け小數のほふがよからんとの注意もあり、此邊人間心で決し兼ね升故御願申上げ升

さあ尋る事情〳〵、いかな事情も尋るやろ、尋るからは一つ順序さしづにおよぶ、此道とゆふなんにもなき處よりはじまつた道、かるいとゆゑばかるい、しらんものからゆゑばかるいものなれど、かるきものやない、かるきものやないとしてみれば元

はどふゆふ處からでけたか、世界はしらん、そこでぜん〳〵にもさとしたる、どこへどふしてゆるしとるやないとはきいているやろ、どふもならん一時ひのきへたよふな道であつた、それよりしんじつりに治まりたかたまりやで、めん〳〵おもふこゝろはよぎなく事情である、よふきゝわけ、一時とふれん處をかなゝ道ゆるしたる、おれはあの塲へでなんだはいらんだとゆふよふではどふもならん、道とゆふりきゝわけどこへどふするやないとゆふてくれた教祖のりをもてくれ、今の處ほんのおぎない迄のもの、そこでまだ〳〵どんな道をとふらんならんやらしれん、おれは名前はでなんだはいらなんだとゆふ、教祖のりから聞分けばどんなりも治めてくれ、おらこふおもふどふおもふとゆふはおもい〳〵のりだけのもの、せいしんの理によりてなりたつものである、ぜん〳〵ひかへ柱とゆふたるものでも、これはどふゆふ理になりたるか、しやんすれば分るやろ、おふぼふとゆふりさへ聞分けば、ひろいもの、名前とゆふどれただけの理とおもへど、ひかりなければそれだけのもの、なまへをださいでも天がみとうしとゆふ理きゝわけ。

△押して只今のおさしづからしやんすれば、此度の事情は世界おふぼふのりで有り升から、その理に治めさしてもろて宜敷御座り升か御願

さあ〳〵それははなしとゆふものは、とりよ〳〵でそふいする、心にりをふくむものもある、よふきゝわけ、どれだけすまにいてもかげにいても、天がみとしとゆふ、これさへ聞分たらとふぶんのり治まるやろ。

△しばらくして

さあ〳〵今日の日とゆふ、はじめかけた一本立とゆふ、一本立はどふでもこふでもならにやならん、これまでならん〳〵からたちこしたるどふりから世上のりとふしたる、さいしよふにどふしよふしらんとゆふた日をおもへば、今日は何もゆふことはない、道とゆふ理を聞入れ、代々とふりたなれど、それ〳〵治まつたりは天にうけとつてある、世界りでうつさんならんからはたらいている、おふぼふのりとしてゆるしたる、さあ〳〵どんな事でもやりぬけよふとゆふ、とふりぬけよふとゆふせいしんさいあればどんな事でも、今日の日はとふりぬけられるものである。

△明治三十二年八月十一日日本橋教會事情に付治方に增野氏より書面にて御指圖の御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、どふゆふ事情こふゆふ事情、事情とゆふりはない、たゞ一つみな中にたへるにたへられん、そらふく風のよふなる事情、そらふく風のよふな事情から心にほふと事情、これは一時一寸をさめにくいはこびにくいなれど、中にみなそれ〳〵中とゆふりが、そこで一人でいからん、順序一時さとし、事情よほどしにくい、しにくい事とゆふはおふい、そふぞふりがある、そこで萬事みな〳〵中にあちらからこちらから一つ〳〵いづみ、いづみきつたる風のたより〳〵、この理からとりしらべとりしらべ萬事とりちがい、きゝちがいをさめ方むつかしいなれど、此道とゆふりからきゝわけさゝにやならん、

又たに順序これからさとしきゝわけさゝにやならん、心ちがい
あつてはなろふまい、心とゆふりありやこそいつとゆふ事なく
しておさまつたる、みなこれまでさとしたる、どふでもこふで
も此道一つはちやあらせんほどに、心やすめさとそ、どふでも
めん〳〵心の限り、どふしよふこふしよふなんぼおもてもなら
ん、めん〳〵心のとりちがいとゆふ、一時あちらからもこちら
からも心とゆふりいづみきつたる、このいづみきつたる處さと
すは此道よりないで、此道よりないが、心にそはねばどふもな
らん、このりだけ一寸さとしおこふ。

△押して一人ではいかんと仰せ下さるが、上京なし
て下さる御方もふ一人御苦勞してもらいましたら
如何で有りますか

さあ〳〵一人ではそらいかんとゆふは、もふいづみきつたりは
一人ではやりにくい、一名二名三名よりそれそれおもやく〳〵
さとして、一つ〳〵おもやく、それより心やすまりてくれ、ど
ふでもこふでもこの道よりなきもの、このりさとしてくれ。

△押しておもやくと仰せ下さるは分教會重役で有り
ますか

さあ〳〵はやくするがよい、もふいづみきつたる中である、は
やくするがよい。

△明治三十二年八月十七日日本橋分教會長前事情に
付增野氏段々御運びの上御願猶是に付將來如何致
しまして宜敷か

さあ〳〵尋る事情〳〵、事情はぜん〳〵にあら〳〵一寸さとし

たる、一つ事情はじまれば一寸いかんそこで一人二人三人はなしとゆふり一つさとしたる處一度二度三度まではこんでぜひとゆふどふもならん何かなくしてたゞおもひつめたる處さあ〳〵どふなりとこふなりととこに事情あれば一時どふなろふかしらんこふなろふかしらんとみなおもふそれ〴〵の處ならん處おもふてならんこれまでひとところやない二ところやない一つのかたのこりてあるこのりめん〳〵もつて一度の處二度三席はこびてこれ一つとても事情ならん處ならんやみなそふ〴〵であろそこで一度の處とふく處ゆはずしてはこびいよ〳〵とゆふてすればどふもなろふまい。

△押して

さあ〳〵もふ一度なあならんなあ、いやとゆふ處むりにゆふた處がならん、みんなの處それ〳〵はこんでならんやならん道ある、道についてならん心にかゝる、心にかける事いらん、みな是迄心にさとしたる、心でする事どふもならん、一名一人でする事どふもならん。

△明治三十二年八月十七日桝井伊三郎長女いま十六才身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ〳〵おもいがけない身に事情、いかな事とおもふ、又一日定めて一つり、身上あんじる事いらん、ぜん〳〵一つ身上たいへんかゝり、それ〳〵さとしおいたる事情、なんでもかでも内々みなだんじ、心にかゝる一つ事情、これから内々元にあるか末にあるか、元にあるか末にあるか、この一つ事情きゝわけ、あちらへ一つこちらへ一つ、心と

ゆふ順序、道の上の事めん〳〵それぞれおもい・みな心得の爲め〳〵身のせつなみみて心とゆふ、さき〳〵諭したるこのりしつかりみわけきゝわけ、この事情第一かゝる、事情又それ〳〵だんずる處ある、もふなんぼふでも〳〵とんとはかりかたない、内々おもなるものおもなるものにかゝればはこばにやならん、身に一つさはりとゆふ身上あんじる事いらんとさとしおこふ。

△過日増野氏の身上よりの御指圖から、だん〳〵の事情運んで居りますなれど、是れとゆふてもまだはこびきれた事ありませんが、其事でありますか又村田の方でありますか御願

さあ〳〵萬事の處は何かの順序とりなをして、だんだん日々おくれるばかりではならん、身の處おもひがけない處から順序さとしたる、たへられん中にをい〳〵そらさはりさはりでる處、又かはりて又さはりたに事情ありていかん、むねをへだてゝあれどおなじ一つ事情、この事情もつて身のたへられん事情から又日がのびる〳〵、ついついおくれる、つい〳〵おくれてならん、この一つ事情きゝわけてくれ。

△明治三十二年八月二十一日梶本宗太郎家族本部へ引越するにより、跡の處淺田德次郎に任せて引越候義御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあゆつくり筆にとらにやわからん、一代〳〵又一代くれ、ゆへば二代三代事情、何代たつたて、どふでもこふでもなつてくるがり、所とゆふ立越してこちらへと

ゆふ、どふでもこれまでおくれてある、ゆへば三代りになりたる、はやく心になあつたら心のりゆうくりさとす、これまでなき事ゆふのやない、三代あとこのりほのか〳〵たち、又年限たちよふ〳〵はへつてたちかへつたり、此屋敷元々はじめた屋敷よふきゝわけ、これからとゆふ心もつてじゆん上はじめかけるとゆふり、一寸りにさとしておこふ、どれだけよい木〳〵とゆふ、屋敷にたのしむりさとす、此木十分〳〵とおもたてそれたいそふたあた木でも心が治まらにやどふもならん、親からまいた種から年々とゆふ心のりによつてそだつ、年々によつてどこからながめる、かしこからながめる、どこからながめてもなるほどゝゆふは、此道木にたとへてあるが人にさとす、又たにとりつぐやく〳〵順序さとせにやならん、此屋敷世上の一戸しん

とゆふはちがう、一戸しんではない、おもなるりも同じ事、此道のりありてりある、はいつたさかいにこれも〳〵とゆふた處がりがなくばならん、何程おふき木うゑた處が、水あがらにやどふもならん庭先へうゑてたのしむ事でけん年限でなる、又内なる眞柱たのしむものまいてたのしむとゆふ心さいしよふから大きものはない、此道どうりからでけた道、これきゝわけてくれ、日々しゆんまさにやならん、これわからんからどふもならん、よふきゝわけ、ものまいた處人にそだてゝもらはにやならん、是聞分け、これさいしよふから、さあ〳〵とゆふた處がそだたん、そらそだてるものやない、そらこかすのや、あがめるもきゝわけ、植木同様なもの、さあ〳〵何時なりと〳〵さあゆるそ〳〵。

△前御願致しました通り北二階の方へ引越さしても
らいます事を御願

さあ〳〵まあ〳〵かゝりとゆふは、年限そふとう年限なくばあたへとゆへん、年々理によつてりまあさねばならん、日々つんだりがひかり、心が年限たてばこれだけあたへてもろたとゆふ、年限とふらにやならにやならん、その日からうへた處が水があがらなんだらどふもならん、一日種まいた處が、その日から一人まいとゆへん、くさばいからでた處が何もならん、年々よつてなる、萬事眞柱にしいかりゆふておけ、これから萬事たのしめば又たのしみの道がある、これよふきゝわけてくれ。

△明治三十二年八月二十一日日本橋分教會長の事情に
付前御指圖より永尾、喜多の兩氏出張する事御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、いくる事情も尋る處、さあ〳〵一つぜん〳〵さとしたるり、一時尋る同じ理もふならん〳〵何程ゆふたて同じ理なれど、是迄とゆふりあるによつて二度三度これながらへ事情、親の事情からつたへたる、そこでめん〳〵心をさまりにくい、一時おもふよふとゆへばどふもぜひなきものなれど、これまでの事情によつて二度三度はこび、のち〳〵の心これさとしおこふ、たちこす處心おきのふでるがよい〳〵。

△押して喜多氏先に出張致し一日あいあけて永尾氏
出張下されて猶運びの都合に依て増野氏出張下さ
る事に運ばして貰ひます

さあ〳〵二度三度りもはこび、又ならんといへどならん處もふ一つりもはこび、ねんの上もねんをいればあと〳〵りもある

〳〵、治める一人又あと〳〵とゆふ、これまでとゆふ〳〵みんなまんぞくあたへにやならん。

△明治三十二年八月二十二日郡山分教會長平野楢藏氏身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵いかなる事も中わからん、さあ身上にかゝる、あちらこちらかゝる、だん〳〵身上よりしあんせにやならん、一寸ながいなれどたへられん事情でない、一時尋ねにやならん、たへられん事情でない、これだけなら〳〵とおもい〳〵日をおくり一つさしづもらはにやならん、おさめおかにやならん日とゆふは、よふきゝわけ、身上から尋ねにやならん、さあなくばたづねる事あらせん、尋るからゆつくりさとす、とも〳〵二人は道の所みなおもなもの、一つ萬事始め方一人のこらずかゝる、よふきゝわけ、なんでもかでもつれてとふりたい〳〵、どふでもこふでもつれてとふりたい〳〵、よふきゝわけ、だん〳〵是迄長い年限の間こふのふありて道である〳〵、そんならこふゆふ事ありたどふゆふ事ありたしらんでない、すればたのしみある、道の心あればどんなとふりにくい處とふられたは、道のこふのふでとふりたる、又一つさとす、身上かゝりどふなろとゆふ處からしあんさだめ、よふきゝわけ、とふい道あゆむのにおもいにはあゆみこくい、とふる事でけん、かるい荷はあゆみやすい道のりであるから、どんな事もとふしたる、さあおもりかゝるせつなみはおもり、めん〳〵身にたへなんでもりからたがいつたへやい、そらあす、そらけふかるいにはあゆみよい、よふきゝわけ、もんかたなきところから、だん

〳〵よせたるみからどふとさだめ、道のあんじはいらん、道をとふしたいから何でもかるにでなくばいかん、かる荷は何時でもかよはれる、重荷はかよはれん、一町の道もとふれんむこへ〳〵といかりやせん、此道はみなおなじ道からでた一つのり、めん〳〵身のなやみはこたへるなれど、人の身上はこたへん、みんなそふ〳〵の心定め、ほんになるほどと定めつたへやい、あゝとゆへばあゝ、身の處あんじる事いらん、なんでもかでもいためてなりとかゞめてなりとつれてとふりたいからしらす、あさ目がなる（一本にはあさ耳がなるとあり）さあどふや、もふひがら長い、長い日がらいさんでどこへいことおもたら、なんどきいかるよふ、かる荷は何時でもいかる、おも荷はあゆむ事でけん、あたへは天にある、りにあたへると一つさとしに

およぶ。

△明治三十二年八月二十六日御本席様一昨日より腰痛みに付御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ一時事情〳〵、身の處〳〵何心なくたのしんでる中に、一時せまる事情、一時せまる事情は何でもかでも尋ねにやならん、尋るからさとさにやならん、どんなものでも一時せまりてしもたらなんぼどふこふおもふてもかゑりやしよまい、とりかへしでけん、あい言とい言でけん、どんならん、どんなものあつたてあめが下にないとゆふても、身上からりがある、席に身上さはりつけたるり、筆に十分しらせゆつくりさとすほとにぼつ〳〵筆にとれ、十分つたへとてならん、つたへる事でけんから身上にしらせ、心に十分さとさにや

ならん事つたへる、是迄きいた理、どふゆふりなら、何年以前きいているものあればきかんものもある、しんにりを聞いて聞いた處がきいたばかりでは心にはまる事でけがたない、たゞ理治まる、治まればはたらかさにやならん、はたらかさにや治まりたとゆへん、どふゆふりさとすなら席々世上たいせつあらはれる、ある〳〵は道のりによつてあたへたのや、よふきゝわけ、これわからねばいけんのためどんな事かゝるやらわからん、あれば十分とおもふやろ、あらはれたる理は三十六年以來こふのふ一つの順序あざやか、きいた處が心にあらためにやならん、たゞ世界のはなしきいたよふなもの、元よりこつこふはない、さぶい處たきゞもなき事情から一つさとしたる事ある、年々りによつて天よりあたへたもの、よふきゝわけ、あちらこちらぎりつとめる、同じ理とゆへどりの中に理があるほどに、これきゝわけ、これよりほどのふぢゆんじよふ子供つれかへる、つれかへつた處が一時いきふかんよふな事つゞいたらまんぞくあたへる事でけん、年限のりであるほどに、もふ今日の日みれば世界年を合せるとゆふふよふな事になりたる、元々二十年三十年あと百姓からこゑをき迄してきたもの、あと〳〵いんねんでよせてくるものには十分さとせにやならん、其日をつとめぜん〳〵あしばなくばどんとおちんならんとさとしたるりもあるとさとしおこふ。

△明治三十二年八月二十六日山澤ひさ三十七才身上
に付御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあいかなる事情〳〵〳〵、身に一つ

事情あつたこそ何か事情尋るやろ、尋るからはぜん〳〵もつて事情みなさとしたる、事情よふこれをくはしく筆にとつて何よの理もこれにそふ、いかな事情みればどふなろとおもふ〳〵、身上にせまる尋ねにやわからん、尋ねるからはさしづ、さしづどふり理をまもるはさしづどんな事もさはりすぐと治まるはさはり、みなあつまるとゆふりをさとす、ぜん〳〵さとしたる事情、どふゆふ事いかん、こふゆふ事いかん、これゆいにくい、さとしたり、心にあつてもまもらにやならん、心にあつたらそのりたてにやならん、たてなんだらまもつているとはゆゑん、りにきかねば一つもいらん、一つのりをかぞへてみよ、みなんでもおもい處におもいさはりつく、みな治り事情ある〳〵、ぜん〳〵こふしてどふして萬事ゆるしたるりある、又さとした

るりある、さとした處がまもらなんだらきいたりとはゆゑん、よふきゝわけ、おぼりた理をさとしたる、どふでも年限一つのり、こふのふによつてはへる、古きはなしより年限の順序おはねばならん、きゝながしてはならん、又みんなの咄しみんなのりにさとす、おれもこふきいている、どふきいている、みな會議にするふそくなし心にもつてる事いらん、道によつてゑんりよきがねはいらん、なるほどゝゆふ、一寸ゆゑばこふもせにやならん、どふもせにやならんなれど、よふきゝわけ、道の上からなりたあたどふりの道である、道はどふゆふ處からなりたあたる、はじめ一つからそれ〳〵道具をもつてひらく、ひらくからなりたつ道のどふりをもつて、一つ一つ治めてくれ、かならずさとす、くさばいの中へまいた種はいたよふなもの、年限

のこふのふによりてなりたつもの、ゑんりよきがねはいらん、人もそだつわがもそだつとゆふは、それはこんでくれ、りの處かるきりはさとしてない、のぼろとゆふはあしばなくばならん、神の道にあしばなしにのぼりたらどんとおちんならん、おちてはきのどくとゆふりをさとしおこふ。

△明治三十二年九月一日日本橋分教會長中臺勘藏氏
辭職に付永尾、喜多運びの都合により增野氏出張
下さる事御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあ〳〵さいしよふ順序りを尋ねにやならん、いかん一寸ならん、いかんとさとしたる、心におもいつめたる、とりなをすにとりなをす事でけん、そこでなるとならんと治め方してくるがよい、一時まつている〳〵、何か順序治め方まかせおこふ、まかせおくによつてすみやかいてくるがよい。

△明治三十二年九月一日永尾よしゑ三十四才身上願

さあ〳〵尋る〳〵身上〳〵、ながい〳〵よふでもわるい〳〵、よい日はよい日わるい日はわるい、よほどながい順序どふしてもいかん、いかんからさしづしてある〳〵、さしづしてあればとゆへばさしづとゆふ、このりはとりつぶしてはいかん、そこでおや〳〵じき〳〵はなしする、もふ一日〳〵日をおくりてはならん、身上こふなりてさしづ、さしづはおやがすぐとはなしする、めづらしいさしづ、どんな事もこんな事も身上あんじてはいかん、あんじていてはきりがない、あんじてはならん、おやすぐにおもわくつたへてりよほふからもちよつてのはなし、

席しもたらすぐとそれだけこふゆふ事であつたとすぐにつたへはなし、なんでもかでもそらどふこらどふとめをくはなししにくい、そのば〳〵そのばこふゆふどふりであつたとつたへ、十分のさとしを十分のはなしをつたよ。

△明治三十二年九月七日山澤ひさ三十七才身上御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、だん〳〵事情を尋ねきる、尋ねきればだん〳〵事情尋ねるりをさとす、さき〳〵これからとゆふりをさとする、よふきゝわけ、ながい事情こまる、事情よふ治めてくれ〳〵、みんなそれ〳〵おふく中である、たに事情〳〵事情のなき日あらせん、あちら治まればこちら、こちら治まればあちらときおさまりかねる、とき〴〵事情よふきゝわけ、身上せつなみ尋ねたせつなみからさしづ、さしづからばんじりのとりかへすればおさまつたる事情あればはこばにやならん、事情あるよふきゝわけ、ぜん〳〵さとしたる處、みなの中にあるにより、いついつさしづこふあつた、どふあつた、だん〳〵はこばにやならんせまりきつてからならんからみなつなぎよふてはこばにやならん事はこべはきれいになる、きれいな事あればどんなはたらきもする、どんなしゆごふもするとぜんにだしてある、なが〳〵事情きゝわけ、人の心とゆふものはそらわからせん、ゑんりよきがねはいらん、めん〳〵身にかゝりてくれば精神定めにやならんとゆふ、みな定めた處が日々おくれ、月々おくれ、年々おくれるとゆふどふりになるもの、だん〳〵せまりたる〳〵、内々もせまり世上もせまりたる、萬事これで内々きれいにまたがりないか、早く順序治めてくれ、ほつておけばい

つまでもながれてしもてからどふもならん、だいかいの中へいつてしもてからやい〳〵ゆふた處がどふもならん、なつてからとりかやしはない、あい言とい言なきよふになつてからどふもならん、とさとしおこふ、是迄こふゆふことあつた、どふゆふ事もあつたと萬事はやくしらべ、道とゆふりさしづあつて、道があつてさしづ、さしづほつておけばいつまでも〳〵ほつておけばこれみにくい、みにくいからいや〳〵とゆふ心でる、そも〳〵になるり、かるいよふおもたていかん、いかんよふなつてから治まらん、よふなつてからではならん、萬事こふしてどふしてきまりとつたてきまりだけではどふもならん、日がらおくればつい〳〵わすれてしまふ、これ早く内々の處きれいになる、よふきれいにしたら身の内さわりつかん、どこにこんな身のさはりなんでなろとおもふ、それ〳〵あたまへかゝる、あたまへかゝればほつておけよふまい、うけとつてこふとおもへども日がおくれる、つい〳〵わすれる、わすれたらいちかけからいかにやならん、一日の日も早く心やすめの理をたのむ。

さあ〳〵身上尋ねてどふりさとさにやならん、心にあんじてはならん、とき〳〵かはりおこる日もあればおこらん日もある、あちらにもあるこちらにもある、そのよふなりもとつてくれ、これからあんじてはならんあんじる事はいらん、としがわるい、世界おなじよふな事やなあとおもてはころりとちがうでよふきゝわけ。

△明治三十二年九月八日日本橋分教會長選定迄事務
取扱人中臺庄之助を以て御許願

さあ〳〵尋る事情〳〵、さあおもい一つこふゆふ事となあ、それ順序思ふなんと心一つどふもならん、いくめ何人あれど心とゆふはべつのもの、こふと思ふ心あつまらんはべつのものなれど、道とゆふり心にあればみな一つとゆふやろ、なれどまだほつと心におもいつめたるりはつさんでけん、そこでよぎなくであろ、みなどふも事情一つ尋るり、みんなそれ〳〵あと〳〵しいかりつなぐならしいかりみちみへてくるとさしづしておこふ、一時尋る事情みんなの中、こふとおもふならみなまかせおこふ。

△明治三十二年九月十五日御本席様昨日夕方より俄に身上御障り有之候先日も同様の御障り有りしに付合せて御願

さあ〳〵尋る處〳〵尋にやわかろふまい〳〵、一度ならず二度ならず、よい事はたのしんで心一つ日々とゆふ、何か順序ぜん〳〵もつてさとしたる〳〵、なれど事情尋ねて順序一つ〳〵、筆にとつてそれ〳〵心におさめてくれにやならん、いつ〳〵も尋る、みな〳〵順序さとしてあるなれど、聞いたばかりでつい〳〵ほつておく、どふもこふもならんよふになつてからはとりかやしでけんとさとしてある、心とゆふ心に事情あるから身上のさわりとゆふ、心事情がさわるとゆふ、どふゆふものでこふなる、みんなそも〳〵の心ではおさまらん、早くさとしたる何か順序おくれてある、おくれきつてはならん、どふゆふものでおくれるなら、どんな事もこんな事も日々はたらく中である、世上まんぞくあたへるりきゝわけ、一日やすんだらあすやろふ

か〳〵とまつり聞きわけ、よな〳〵さわる、あけたらなんでもない、一日はよい二日はよい、五日十日の事情になつてからはどふするぞ、たのしんだりこれでとゆふ處あきらかさとしたる、たゞ一つの言葉から出てみんなまんぞく、國々處々〳〵さかんとゆふ、たのしんだ事情もふこれ一つおくれ二つおくれ、おくれきつてからはどふゆふ日みにやならんとも分らん、いさむ〳〵いさんでくればいさむ、一つのりでもつたる、一人つとめば双方おさまる、めん〳〵あちらもこちらも何もかもすれば用がかけるとゆふ、此どふりからしやんせよ、よくわかりたか、わからにやなんぼふでもたづねかやせ。

△押して三軒三棟の名前付る事此間教長様より扱ひ人へ、御聞せ下されし處、御本席様へ申上候へば

普請落成なりてから願ふてくれと仰せ下さいましたが此事御知らせ下さい升のか

さあ〳〵尋る處〳〵、一つおさまればみんな治まる、おさまらんからおさまらん、そこでどふしてくれこふしてくれはゆはん、長らく年限の理をながめて聞分け、どれだけ何があつたて心にたのしみなくばはたらけよふまい、どふせこふせこれはゆはん、いつ〳〵一つの心があつまらにやどふもならん、ひがら一つ〳〵あつまれば、ほんにそふやつたなあとゆふ、日々とゆふ順序からみればもふたのしみなけにやなろふまい、年々とゆふりがある、よふきゝわけ、もふ年もそこい〳〵であろ、なくなつてからどんなりおさめてくれたてどふもならん、はんぜんたるとはゆへよふまい、よふきゝわけ、一日のおさまりは末代

のおさまりとゆふ、どふしてくれこふしてくれこれはゆはんで、日々の處まんぞくあたへるにんとゆふはみんなの心一つにおさめてくれにやなろふまい。

△押して三軒三様の處、西の方は永尾で御本部の方は政甚で同新築の處政枝のよふに聞してもらいますが如何で有ますりか

さあ〳〵まあ一時尋る處〳〵、どちらも一つ一つおさめてくれにやならん、萬事とりさがしてある、そこで出來してからおさめてくれにやならん、はんばの中ではどふもでけよふまい、どちらどふなるやら、こちらごふなるやらわかろふまい、三げんならべたてた處一時さとしてない、まだまんぞくあたへてない、出來してから一つ〳〵りをさめてくれ〳〵。

△押して普請の處いそいで仕上げます

さあ〳〵一つ〳〵尋る處、ぜん〳〵よりもさとしのり、これ一つ二つ心もつてさとしたる、これだけもといれてよふでけたなあ、これがあたへかとみなよろこんでくれにやならん、くろふさしてはあたへとはゆゑん、古い咄しにもしてある、ぜん〳〵はじめかけよふいやない、ほんのくさばへの中から出來た、今日の日はおふいの事情になりてある、まあぶないなあ、こわいなあとゆふ中からでけた、今日の日一時になつたのやない、人の義理をおもてなるかきゝわけ、天のりからでけてくるのがあたへ、あたへなくばどれだけはびこつてもしりぞかれたらどふもなろふまい、いそいでかゝりてくれ〳〵、いさんでかゝりてくれ〳〵、いさみなくては受取るりはない、よくきゝわけて

くれるよふ。

△明治三十二年九月十九日(舊八月十五日)忠藏氏の屋敷買入る事御願

さあ〳〵尋る事情、よふ〳〵さあ〳〵まあまいよ〳〵理をつたへたる、いづれ〳〵ひとつ〳〵、おそいかはやいかおよばさにやならん、りのあつまりてこふとゆふやりをおさめてくれ〳〵。

△明治三十二年九月十九日增井りん以前御さしづより教長樣の御許下されし別席御運び下さる夫には本部員同格とゆふ御指圖もありますれど、教長樣より本部員の御辭令御下げもらひまして、詰所へ札かける處しきつてはこんで御座りませんが、し

きりて教長樣へ御願申して本部員の辭令も下げてもらいましたもので有り升か御願

さあ〳〵尋る事情〳〵、いかな事をも尋ねにやならん〳〵、ひがらとも刻限ともゆふてさとしたる順序もある、なんでもかでもどふゆふ事もこふゆふ事もみなしる中もある、しる中からどふでもこふでもはこばさにやならん、おなじ一つの理である、此道男女ゆはん、此順序元さとしたる、存命よりさきのたのしみさづけたる理ある、古い〳〵はなし、ふるなつたらなあとゆふよふな事ではゆく〳〵うつとしいてならん、事は尋ねたら一字もぬけんよふゆつくりさとすによつて、くはしい筆にとつてくれにやならん、もれおれではならんから、筆一人ではいかん二人筆とれ。